大原幽学の基礎的考察

大原幽学全書・全集本の検討「奉行所本」を中心に

鈴木映里子

Research on OHARA Yugaku Viewed from the *"Bugyosho-hon"*: a Historical Study Based on *"Yugaku Zensho"* and *"Yugaku Zenshu"*

はじめに
❶『幽学全書　完』と『幽学全集』
❷これまでの研究
❸所収史料の検討
おわりに

【論文要旨】

本稿は原典史料の検討を中心とした史料論的考察である。千葉県東総地域を舞台に活動した農村指導者大原幽学、彼に関する研究はその多くが『幽学全書』『幽学全集』に依拠してなされてきた。しかしまたそのことが要因として事件発生時期の事実誤認や、読み違いがあることも指摘されてきている。

刊行から半世紀を過ぎてなお、幽学研究に大きな影響を及ぼすこの「聖典」を、その収録著作類を点検することで、底本としての「全書」「全集」が刊行されてから抱える問題を僅かでも明らかにすることが本稿の目的である。

これまで俎上に載せられることが稀であった「奉行所本」とよばれる稿本類が再発見された。関東取締出役の手先が、幽学の教導所である改心楼に押し入るという「牛渡村一件」が起こったのが嘉永五年四月、幽学と門人たちが銚子本城村で関東取締出役の吟味をうけた後、上部機関である勘定奉行所に差出になり、幽学が召喚されて出府したのが嘉永五年十月である。この召喚の際に証拠書類が提出された。判決が下った安政四年には返却され村に持ち帰られたと思われる。そしてそのうちの数点が特別にまとめて残され現在まで伝わってきたのである。幽学の門人たちをして、もっとも重要な書類と認識された自筆稿本、それが奉行所本である。つまり幽学の核をなす基礎資料ともいえるものである。

『幽学全書』『幽学全集』にも収録されているこれら史料を、奉行所本九冊と現存する遺稿を含め、再度検討し現在の視点でその成り立ちを捉えなおしてみたいと思う。

はじめに

本稿では、幽学の基礎資料の検討を目的とする。これまでの研究をふまえ、特に幽学研究をする際に必ず使われる『幽学全書』『幽学全集』に収められている資料を対象として、各文書の出典、成立時期、所蔵先、伝来を再度検証してみたいと思う。

今回の東総地域をフィールドとした研究の成果の一つとして、すでに高橋敏氏が「大原幽学と改心楼乱入事件―「牛渡村一件」の真相―」にて、事件発生時期の事実誤認について指摘している。この原因は「幽学研究の多くが原典の如く利用している先行研究、田尻稲次郎（実際は高木千次郎の編）『道徳経済調和之大恩人農村経営上未聞之偉績　幽学全書　完』（大正書院、一九一六年）（「全書」とよばれる）にあるように考えられる」[1]と言及されている。刊行から半世紀を過ぎてからも大きな影響を及ぼすこの「聖典」を、その個々の収録著作類を点検することで、現在の視点でその成り立ちを捉えなおし僅かでも齟齬を確認していこうとするのが本稿の意図である。つまり原典史料の検討を中心とした史料論的考察である。底本としての「全書」「全集」が抱える問題を僅かでも明らかにし、今後の研究への端緒となれば幸いである。調査が行き届かない部分は諸方からご叱責をいただくようお願い申し上げたい。

❶『幽学全書　完』と『幽学全集』

幽学研究のもっとも初期の段階で刊行されたのが「子爵　法学博士田尻稲次郎編纂」の『幽学全書』（初版は明治四十四年〈一九一一〉七月に発行、ここで引用しているのは大正二年八月の再版本）である。全五六六頁にわたって幽学の業績と史料が紹介されている。この「全書」には、幽学の著として「微味幽玄考」「道徳百話」「分相応」「発教録」「口まめ草」「残す言葉集」等が収められている。冒頭の「第一巻　事績」（高木千次郎による）には、文中で各種短文も紹介されている。

その後、これをさらに充実させた『道徳経済調和之大恩人農村経営上未聞之偉績　幽学全書　完』が大正六年（一九一七）四月に出されている。現在においては、「全書」は原典が希少本となっているため、使われるのはこちらの増補版「全書」の方である。前出のものに加えて、幽学の日記や門人らによる記録「聞書集」「義論集」「道友列伝」等の史料が追加され、「幽学全書総目録」六六三頁、「幽学全書附録」三五一頁の前後編からなっている。なお、「全書」の頁はこの前後でわかれているため、以後「幽学全書総目録」を前、「幽学全書附録」を後として頁数を表記することとする。

そしてもう一つ幽学研究の基礎史料集となっているのが千葉県教育会編『大原幽学全集』（昭和十八年〈一九四三〉二月発行　十二月再版昭和四十七年十月復刻）である。その巻頭の「編纂に就て」で「田尻博士が以上二回に亘りて発表せられたものに対しても原本に照らして再検討を加え更に八石性理学会の秘庫・千葉県立図書館その他の愛書家の所蔵する遺構を借写して、新たに左の二十三部二十八巻を増輯した」とあるように、合計「四十四部六十二巻を収録」している。幽学の学問「性学」の基礎ともいえる初期の自筆による易学関係の書類が多く追加されている。また「道徳百話」のようにあきらかに幽学の著ではないものは除外されている。

幽学研究初期にあたる、これらの刊行についての背景は、見城悌治「近代日本社会における大原幽学の発見」[2]また木村礎編の『大原幽学とその周辺』のなかの、「1　研究史の概観」にも詳しいので省略する。いずれにしても、この「全書」「全集」の成立背景には、当時の幽学顕彰の色合いが非常に濃く、編纂、執筆の過程からみても史料集としての

正確さに不安定な面があることは周知のことであるが、その後、一部の著作類などをのぞき史料集は未刊のままとなっている。幽学関連の史料が広範で膨大であること、原本特定の難しさからも、比較的体裁の整った「全集」は第一の史料として現在に至るまで使用されるに至っているのである。[3]

「全書」は貴重な記事を含んでいることもまた事実である。[4]幽学の仕法のいくつかは史料的確定が困難である。この書の記載が不安定ながらも事蹟[5]の一端を伝えていることも疑いようがない。加えて、刊行からは既に「全書」で八五年、「全集」でも既に六〇年を経過している。当時は所蔵が確認された資料も現在は見あたらないものも少なくはない。これらの二冊が長きにわたって引用されている所以でもある。

❷これまでの研究

これまでの研究の中でも[6]「全書」「全集」には誤植や読み違い、重複や編者による削除が含まれることは何度かとりあげられてはきている。これについて、一九七〇年代に膨大な幽学関係史料の調査研究を手がけた明治大学の木村礎氏は次のように述べている。

「これまでの幽学研究には、右のような不安定さ（史実確定のあやまり＊筆者注）が多くあったということであり、そのことを意識せざるをえないために、幽学や幽学没後の性学の動向に関する記述が、史実確定のための史料挙示に追われている部分が多々あること、それとは逆に史実的に問題のない部分の記述が簡略化されている傾向がある[7]」

明治大学グループによる東総地域を中心としたこの共同研究は、前述の問題を十分に意識しており、非常に信頼できるものであるとともに、その後の幽学研究に深みと広がりを与える画期となった。特筆すべきは徹底したフィールドワークと史料調査を前提とした研究であること、これら一連の研究によって史実の不安定な面が大幅に解消されたことがあげられる。幽学没後の動向が丹念にとりあげられたのもこれが初めてのことである。その成果は『大原幽学とその周辺』（木村礎編）として刊行されている。また木村氏は高橋氏の研究をうけて「いわゆる改心楼事件」の勃発年について[8]」をすでに発表し、そうした危うさを再度指摘されている。

史料集を中心とした研究史

もちろん「全書」、「全集」以外にもまとまって史料が収録されている例は他にもある。主要な著作と併せて、刊行年順にごく簡単に紹介したい。

まず幽学没後（安政五年三月八日以降）、もっとも早い時期に登場するのは八石性理学会による刊行書類である。八石性理学会とは、幽学没後、性学組織により設立された財団法人[9]である。幽学没後の性学組織、また同会の設立については木村礎の書[10]に詳しいので参照されたい。ちなみに全書の附録に掲載されている「第十二　八石教会々則」というのは、八石性理学会の前身となる八石教会時代の会則である。

つまり、最初の幽学研究は性学門人や地元につながりの深い立場の人々によってスタートしたということである。多少の波はあるものの、八石性理学会は折に触れて刊行物を発行しており、それは近年までも続く同会の活動の一つとなっていたようである。

その幽学顕彰活動の足跡は、何冊もの刊行物にみることができる。一番最初の文章は高木千次郎による『大原幽学事績』。これは「全書」刊行の発端となった文献である。明治四十年に初版がだされているが筆者は未確認[11]、現在確認しうるのは明治四十三年十月発行のもの。本編七九頁、附録一四頁で、後に「全書」に掲載される短文類はほぼ網羅されている。

そして明治四十四年、最初の「全書」の刊行をはさみ、続いては八石性理学会編『大原幽学書簡集』（大正二年六月　静岡民友新聞社／八石性理学会発行）、全八四頁。序文はなく、冒頭に幽学自殺のさいのいわゆる「書置」が大きく掲載されている。この書簡集におさめられた資料は、すべてそのまま増補版「全書」の「第九巻　書簡集」へと収録されることになるものである。

同年十月には『口まめ草』（八石性理学会発行　これも印刷は静岡民友新聞社）も単行書として刊行された。「書簡集」同様に序や巻頭言もない、一五九頁の冊子である。「口まめ草」は「全書」で既に活字化されており、この抜刷版かと思われたが、一点異なる点が見られる。それは、この『口まめ草』が（上）（下）に区別されていることである。そもそも幽学自筆稿本の「口まめ草」[12]は一冊の横半帳であり上下に別れた構成にはなっていない。この自筆本は、幽学独特の細く痩せた小さな字体でびっしりと書かれている。このもとになった「口まめ草」は八石が「貸出本」として使用していた写本[13]と思われる。この写本は「八石」「貸出本」との明記がある和綴の冊子で二冊からなり、文字も大きい。幽学自筆による原本の判読は容易ではないためにこれが用いられたとみてよいだろう。この他に現存する後世の写本はおそらくこれを種本としているためか、例えば一冊にまとめられたものでも「口まめ草　上下」と書かれた写本が多数存在する。これに倣ってのことと推測される。

幽学本拠地である八石性理学会以外による刊行も登場してくる。

千葉県内務部編（執筆は池田淳）『大原幽学』（雙文館　明治四十四年九月）。全二九七頁。初版「全書」とほぼ同時期に刊行されている。池田氏は例言で「大原幽学の事蹟は、目下研究の初期にありといふべし。其書簡記録伝説及門弟の日常、その目覩耳聞せる材料の蒐集批判等につき尚開拓の余地頗大なり」と述べている。そして執筆にあたっては「県下香取郡中和村八石性理学会理事高木千太郎氏、中和村尋常高等小学校長高木喜助氏及教会員飯島八十八氏遠藤新太郎氏等の好意により、其所蔵にかゝる一切の材料を借覧し、其幇助を得たるに依る」としている。つまり、八石史料を見た上で同書を書いている。これについては木村礎氏の言葉を借りる。「本書は、第一編「大原幽学伝」、第二編「大原幽学の学説」、第三編「大原幽学の教育及風俗改善」、第四編「幽学の農村改善」より成り、きわめて整然たる体系を持っている。池田の立てた体系は、後人に大きな影響を与えたようである。池田のこの書物には、独特の批判眼が光っており、幽学を高く評価しながらも、のめり込んでいないという特徴がある[14]」。

続いて、岩橋遵成『大日本倫理思想発達史　下』（目黒書店　大正四年二月）、下巻だけで九六一頁にも及ぶ著作である。また「思想家」としての幽学を採り上げた最初のものとしてここに紹介したい。「第四章独立学派」で、一　三浦梅園、二　二宮尊徳、三　大原幽学[15]、の三名が挙げられている。小伝で「二宮尊徳にも劣らざるに拘らず、事蹟の顕はれざること久しい間であった。それは彼の敢て名聞を求めざりしことに因るのであるが、又これに関する書の出版されて居なかったことが原因である。明治四十四年の頃、千葉県内務部の編纂にかゝる大原幽学伝の出版ありしと共に田尻博士の編纂に成る幽学全集の出版によってやゝ世人に知らるゝに至ったのである」と述べられているように、「全書」と内務部編『大原幽学』の二著作を元に書かれている。書置、幽学頌徳碑文、神文の他には議定仕候以来の始末書、聞書集、各種文章の抜粋からなっている。

この後は、大正六年に増補版「全書」の刊行をはさみ、『大日本思想全集14　二宮尊徳・大原幽学集』上村勝弥編（昭和六年八月　先進社）がだされる。巻頭言や解説、あとがきが一切ないので刊行の経緯、意図が不明であるが、ただし、この著はそのほとんどが二宮尊徳に割かれており（全四八八頁のうち、二九四頁までが尊徳集）、「小伝」でも「卒去

した年月は不明である[16]」とあるほどで粗雑な扱いの感は否めない。「道徳百話」と「微味幽玄考」の二つを収録しているが、これも刊行時期から「全書」を使用したと思われる。さらにこの著作の注目すべきは、その二つが口語訳を主として掲載されていることである。頁の三分の一ほどの上部に原書、残りの中心となる下部に訳文が配されており、例えば「微味幽玄考」の冒頭は「一体、性理学上の見地から物の性といふことを観察すれば、天地の調和が性なのであり、性はそのまゝ天地の和であるので、両者は同一のものであると言っても宜い。各地方及び国々の異るに従って人々の性質や風習のちがふ場合もあらうが、北極星ばかりを見てゐる北方の国々でも、常に南極星に接してゐる南方の国々でも、天地の気が合して万物を生じた理屈は同一であるから、性も亦同じでなければならない[17]」といった具合である。これが最初から最後まで続く。しかしながら、すでに地方改良運動の象徴として全国的に著名だった二宮尊徳に、遅ればせながら幽学の名も並んで冠せられるようになってきたことが、この書での扱いからわかる。

その後は飯田伝一『大原幽学の事績』(昭和九年)や高倉テルよる『大原幽学』(昭和十四年)、各種小説伝記類の刊行がある。典拠文献としての性格は強くないものの、幽学の顕彰には貢献した著作である。

この時期にだされた史料集的文献としては、千葉県発行「史蹟名勝天然記念物調査〈第16輯〉大原幽学先生関係書翰集」(奥山市松編　昭和十四年三月)がある。およそB6版サイズの小冊子で全八九頁だが、史料集として非常に良質の書簡集である。「大原幽学遺墨遺品展覧会」が開催されたことがはしがきで述べられており、これを翻刻したものが同書である。「然る処今や我皇国は曠古の大事変たる支那事変下に於て、挙国一致聖戦の大使命達成に邁進しつゝある折柄、郷土偉人の顕彰と銃後国民の精神作興に資せんとして、当局より先生の遺墨編纂を希望せられたるを以て、茲に此の一巻をなし、併せて本年度における余の史蹟調査報告に代へんとするものなり」とある。この展覧会は『千葉県図書館叢書11輯　贈正五位大原幽学先生』(御成婚記念千葉県図書館発行　昭和十二年十一月)という全二〇頁の冊子が編著者を同じくして作成されているので、その詳細[18]を知ることが出来る。これには略伝と本田元俊氏による寄稿[19]と出品目録のみだけだが、それによれば、書簡類だけでなく代表的な関係史料や書画などが各所から集められ二一〇件が出品されている。うち書簡類は一二件、「書翰集」には一九八通の書簡[20]が収録されている。この書翰集が信頼しうる点は、まずその所蔵が明らかにされていること、そしてそれらがこれまでの幽学研究からすれば比較的広範囲な地域を対象に蒐集されていることがあげられる。もう一つは、原史料にあたって翻刻されている点である。奥山氏は、「この外先生自殺の際弟子共の改悛を施したる書置、江戸幽因中献金せる弟子共に贈れる遺書其他多数あれども先年八石性理学会編纂の大原幽学書簡集と重複の恐れあれば割愛する事となせり」とはしがきでのべている。つまり「全書」では登場しないまったく新出の史料で構成されているということである。実際のところ、この後に刊行された「全集」は、「全書」とこの「書翰集」を底本として編集されたように見受けられる。尚、末尾八七頁にある「大原幽学関係図書目録」の「大原幽学関係文書(一)」第一冊から五五冊と「大原幽学関係文書纂」六軸は現在も千葉県立中央図書館に所蔵されている。

そして「全集」(昭和十八年)の刊行をむかえる。

これとほぼ同時期に鴇田恵吉による『大原幽学選集』(昭和十九年四月　読書新報出版部)がある。「本書は既刊の『幽学全書』『幽学全集』及びこの二書に漏れたる幽学の遺稿中から、その精粋を簡抜して十編となし、これに私の多年苦心した年譜を付することとし」、内容はほぼ既出史料の掲出だが、数点新しいものを含んだ全三五〇頁である。鴇田氏も原本にあたって書かれており、注目に値するものである。

戦後になって幽学研究を体系化したのは、越川春樹と中井信彦である。

越川春樹の『大原幽学研究』（昭和三十二年十一月大原幽学百年祭理想社）は、先行研究をふまえ新しい知見をもたらしたものである。農作業の予定表である「仕事割控」や、幽学の仕法の集大成といわれる宿内集落の造成など、これまで言及されることのなかった幽学の仕法を収録している。この著は幽学没後百年記念事業の一環としたもので「著者が二十数年にわたる幽学研究を、満腔の情熱と、心血を注いで執筆され[21]」ており、越川氏のその幽学像は後世に大きな影響を与えている。「しかしながら、幽学・性学関係史料は既刊史料集所収のもの以外にも膨大に存在しているのであり、それらの検討がよくなされていないという問題がある。また、総体に史料感覚が弱く、したがって史実確定において部分的な不安定をまぬがれないという問題もある[22]」とされている。

中井信彦『大原幽学　人物叢書104』（吉川弘文館　昭和三十八年四月）は「幽学の全体像を描いた研究のうち尤も信頼し得るもの」であり、「史料処理の恐ろしさや過去の物事を見ることの難しさを熟知している歴史家の著作である[23]」といわれる。

また中井氏は『日本思想史体系52　二宮尊徳・大原幽学』（岩波書店昭和四十八年五月）においても、幽学の主著「微味幽玄考」と門人との講義録である「義論集」の校訂を行った。これもまた前著と同様、信頼できる文献となっている。

これ以降は、歴史研究としての視座をもった成果が見られるようになる。昭和五十年三月に刊行された自治体史『旭市史』第三巻（旭市史編纂委員会）の「大原幽学関係史料」は、川名登をはじめとする千葉大学グループによる「神文」を中心とした門人研究である。神文とは幽学門人が提出する入門誓約書というべき史料で、同書では「大原幽学遺品保存館[24]」蔵を中心に一九一九通を紹介しているほか、「神文調実記」も収録。他にも旭市域に残る性学関係の文書群が初めてとりあげられている。また、幽学没後の性学組織についての言及もまた初出。『千葉大学文理学部文化科学紀要5輯』に小笠原長也・堀江俊次・池田宏樹・川名登「東総農村と大原幽学―千葉県香取郡干潟町近世史料調査報告書―」が市史に先がけて発表されている。

『世界教育宝典　日本教育編　二宮尊徳・大原幽学集』下程勇吉・久木幸男（昭和四十一年二月　玉川大学出版部）という文献があるが、これは思想的な観点からの史料集で「千葉県教育会編『大原幽学全集』を底本とし、田尻稲次郎編『幽学全書』、鴇田恵吉編『大原幽学選集』によって校訂」したものである。

昭和五十三年は幽学没後百二十年として「百二十年祭」が八石性理学会によって挙行されたが、その記念事業として、松澤和彦校訂による『義論集』（昭和五十三年十一月）と前掲の越川『大原幽学研究』が再版されている（同年十二月）。

そして、現在にいたるまでの研究史の中で重要な画期であったのが、なんといっても冒頭にもあげた明治大学のグループによる共同研究である。その成果は木村礎編『大原幽学とその周辺』（昭和五十六年十月）として刊行された。関連論文も多数あるが、詳しくは文献一覧を参照されたい。同書の序章では「研究史の概観」として頁が割かれ、同書が刊行された昭和五十六年（一九八一）以前についての研究動向は木村氏の客観的かつ適切な文章があるのでここでは割愛する。また、木村礎氏の大原幽学について論考は『木村礎著作集Ⅸ　大原幽学と門人たち』（名著出版　平成八年十一月）としてまとめられている。

平成二年の『大原幽学関係歴史資料調査報告書』（干潟町教育委員会）もまた、明大グループの調査の成果の一端である。これについては後述する。

周辺史料の「発掘」

大原幽学研究の中心は東総地域、とりわけ「性学三ヶ村」といわれる長部村、諸徳寺村、十日市場村の所在史料に依拠して行われてきた。もちろん膨大な関連史料の多くがそこにあることもまた事実であるが、性学門人層の広がりと幽学の活動範囲はそこだけに留まるものではないこともまた事実である。いきおい本拠地である長部に注目が集まらざるをえないが、軽視されがちであった周辺の関連史料についての研究も近年は少なからず散見される。簡略に紹介していきたいと思う。

水谷盛光「大原幽学出自考説」[25]（昭和五十年三月）、主に名古屋を対象にした関連史料を紹介している。幽学は門人たちの間で尾張の出身（特に大道寺玄蕃次男説が有力）と伝えられてきたが[26]、それについての考察である。「小寺玉晁見聞筆録」[27]「甲戌雑々録」[28]は、幽学没後の性学門人の動向を小寺玉晁が記した記録で、大道寺家出自説の否定を裏付けるもの。「清須代官触書」[29]は、晩年の改心楼乱入事件での幕府の嫌疑をうけた際にだされた、名古屋との関連をしめす史料である。

『歴史論』八号（昭和六十二年九月　明治大学近世史研究会発行）は前述の明治大学グループによる共同研究の続編ともいうべきもの。『大原幽学とその周辺』に収まらなかったものを中心とした、「幽学・村落・文化」という小特集号である。幽学没後の関連史料として、松澤和彦氏[30]が「内海御台場築立日記御普請御用中日記」[31]を題材として取り上げている。これは幽学晩年の裁判時に深い関わりをもった人物、高松彦七郎に注目した研究である。判決後に江戸で幽学が謹慎期間を過ごしたのが高松家であり、御家人高松彦七郎の息子彦三郎の記録であるこの日記は表題の御台場築造が中心となっているが、性学とその門人たちについての記述が登場するのである。裁判のときに突然に登場する「高松家」に注目し長部村との関わりを明らかにした史料である。二つ目は藤田昭造氏が、特に性学二代目の遠藤時代に発展した前夜組織について「前夜世話人控」[32]を詳細に検討している。木村氏は文書紹介として、東総地方の世相を記した「出役・手先等悪事風聞書」[33]を挙げている。

また木村氏は同様の意図でこれまで事例のなかった飯倉村の門人を採り上げ史料を紹介[34]している。

史料校訂をともなった文献としては、農山漁村文化協会『日本農業全書63　農村振興　議定書・永代取極申引証之事・永代取極議定書・其方取直日掛縄索手段帳・報徳作大益細伝記・仕事割控・年中仕事割並日記控』（平成七年二月）がある。これは幽学の指導による農事予定表として知られる「仕事割控」[35]「年中仕事割並日記控」[36]を松澤和彦氏が校訂したものである。仕事割は数種が伝来するが、この二点が幽学当時のもっとも代表的な史料であり、また非常に丹念な調査が行われており信頼しうる典拠史料の一つである。

次に、幽学にとって重要な時期である信州時代についての紹介。幽学が最初に門人を獲得し自らの学問を確立した地が信州上田・小諸である。この信州時代への言及は横山十四男・青木歳幸「活動の開始―信州上田・小諸の門人たち―」『大原幽学とその周辺』がはじめてであり、具体的な史料紹介がなされたものには斎藤洋一「大原幽学と上田町・小諸町との関わりを示す史料」[37]（平成七年三月）があり、柏木家文書[38]（1―33）小山家文書（34―40）の計四〇点が掲載されている。

続いて近年注目された日記二点を挙げたい。

一つ目は「平兵衛日記」として知られる日記である。この日記は香取郡野田村（現小見川町）の高木家に伝わる記録で、天保十一年（一八四〇）～明治三十三年（一九〇〇）まで、高木家三代により「年中日記目録帳」「年中行状日記帳」として全五八冊が残る[39]。代々の当主は平兵衛を名乗ったため「平兵衛日記」と呼ばれている。天保年間当時、高木家は幽学の門人だった。野田村での性学活動の記載がしばしば登場している。増田家淳「幕末・明治の庶民の生活の記録―小見川町の一農家に伝

えられた三代六十余年間の日記から[40]」、高部淑子「近世後期～明治初年の小見川周辺と性学―高木平兵衛日記を中心として―[41]」に詳しい。性学を組織の中心からではなく、一般の門人層から捉えた記録である。

二つ目は「五郎兵衛日記（在府日記）」。埴生郡長沼村（現成田市）の門人成毛五郎兵衛の記したもので、期間は嘉永五年十二月四日から安政五年三月二十八日、幽学晩年の江戸での裁判を克明に記録している。現在は成田山仏教図書館所蔵の「大原幽学先生江戸日記」と旧八石史料の「在府日記[42]」の二種類が確認されている。米谷博「『在府日記』について[43]」では八石本の「在府日記　元」、つまり全五冊揃のうち一冊目を史料紹介されている。また、成田山本の「大原幽学先生江戸日記」を底本とした翻刻史料が「五郎兵衛日記[44]」として刊行されている。この二種は表題と冊数は異なるものの、同一のものであるとされる。史料の由来などはこの二稿はもちろん、『房総郷土研究』五巻八号の那智惇齋「江戸日記に就いて大原幽学先生を憶ふ」にも詳しい。

参考文献は本書末に一覧を付したので詳しくはそちらを参照していただきたい。原則として現在所在が確認されうるものを年代順に掲載しているが、遺漏があれば御教示を乞いたいと願う。

❸所収史料の検討

「全書」は前述したように、前半「幽学全書総目録」と後半「幽学全書附録」に大別される。前半の主要著作類以外にも、後半の「事蹟」のなかで引用される史料も多い。それらも含め「全書」の代表的なものは「全集」でほぼ網羅されているので、以下「全集」を元に原本の確定を試みたいと思う。今回対象とするのは「性学趣意」「残す言の葉集」「連中誓約之事」「微味幽玄考」「規式解」「発教録」の六点である。主に幽学の思想を語る上で欠くことの出来ない著作、短文類が中心であるが、あくまでも史料確定を目的とし、思想的な内容の検討は今回の趣旨ではないので、その点についてはごく手短に記すのみとする。

「全書」「全集」に収められているものを別表に掲げた（表1）。基本的に「全集」の目次順とし、番号は同書の目次に付された番号である。★印は「全書」にあるもの、☆印は増補版「全書」で追加されたもの、無印のものは「全集」ではじめて採用となったものである。また「全書」には、「全集」では不採用か、もしくはその表題としては独立して採用されなかったものが数多くある。例として、「道徳百話[45]」は幽学の書ではないにもかかわらず混入していることから、全集では不採用となっている。「分相応[46]」は「微味幽玄考」のなかの一部として編集されているし、各短文は「心得草」としてまとめられている。また「附録」中の事蹟のなかで引用されている各種史料に関しては、今回は残念ながら個々の検討をするには至らなかったのだが、次回への課題としたい。

史料の所蔵についてであるが、同書二つの刊行以来大幅な状況の変化をみているため、ごく簡単に主要な所蔵履歴を説明したい。

幽学関係史料の中核をなすのが、幽学活動の本拠地であった長部（千葉県香取郡干潟町）に伝来する一連の文書群である。安政五年三月八日の幽学の死後、二代目教主遠藤良左衛門亮規、三代目石毛源五郎を経て、性学組織は存続していく。組織の分裂抗争の末に財団法人八石性理学会として現在にいたっている。昭和二十七年十月十一日には、長部にある旧宅、墓地、耕地割が国の史跡に指定されている。昭和三十二年には幽学没後百年祭の記念事業として、大原幽学遺品保存館がつくられ、一般にも資料が公開されるようになった。この遺品保存館は、平成八年、新たな記念館の開館直前まで展示施設として活用されることになる。

明治四十一年の設立以来、長らく遺跡と史料の保存、公開にあたってきたが、維持管理の難しさからも、昭和六十一年、史跡地および遺品類

が干潟町に移管、寄附となった。そして昭和四十―五十年代に調査を行っていた明大グループの調査結果をもとに、平成二年三月に『大原幽学関係歴史資料調査報告書』（干潟町教育委員会発行）が刊行された（その後『干潟町所在史料目録二』も刊行）。これら約四〇〇〇点の関係史料のうち、四〇七点が、平成三年に国の重要文化財の指定を受け、そのため平成八年三月には保存公開施設を目的に建設された大原幽学記念館が干潟町によって開館。一連の史料はここで収蔵されるにいたっている。この旧八石性理学会所蔵で現在記念館所蔵のものを以下「旧八石資料」と記す。

しかしこの所蔵遍歴のなかで、町へ寄贈となった際だろうか、八石所蔵資料と遠藤家所蔵資料とに分割されたことがわかっている。遠藤家とは、二代目教主遠藤良左衛門（亮規）家のことである。というよりも、それまで遠藤家にて八石史料を保管していたというべきだろうが、これは明治大学木村礎研究室グループが行った史料調査により作成された目録を照合することではっきりとわかる。つまり、以前は八石性理学会と遠藤家をひとくくりとして遠藤家所蔵だったものが、現在は「旧八石史料」と遠藤家とに区別されている。

「全書」では特に史料の底本というのは明示されていない。編著者の高木千次郎氏は「材料の収集に尽力し」[47]とあるが、多くは幽学本拠地である八石性理学会に伝えられたものと推測される。附録[48]には「第十三大原幽学の遺稿」として六二件がみえる。

「八石性理学会の秘庫・千葉県立図書館その他の愛書家の所蔵する遺構を借写して、新たに左の二十三部二十八巻を増輯した」と「全集」の序にあることから、史料の確定にあたっては旧八石性理学会所蔵の史料を検討の中心としたいと思う。

1　性学趣意

「全集」一―二六頁。これは幽学の主著「微味幽玄考」の前身と位置づけられた書である。旧八石資料には著作の自筆本で完成本は存在しない。すべて下書き、断簡であるとされている。[49]

おそらくこの底本となったのは、旧諸徳寺村菅谷家に伝わる「性学趣意壱」「性学趣意弐」「性学趣意三」全三冊の写本[50]と思われる。諸徳寺村は性学三ヶ村のうちの一つ。

全集本には「性学趣意前編」「性学趣意中編」「性学趣意後編」となっているが、この前中後編と壱弐三とが一致するわけではない。「性学趣意壱」は「全集」の「前編」の途中で唐突に記述が途絶えており、「性学趣意弐」の半ばまでが「前編」部分に相当する。同じく、「中編」も「弐」と「参」にまたがった形で文章が続いており、「後編」は「三」の

表1　「全集」所収史料一覧

1	性学趣意
2	残す言葉集★
3	道友議定の事
4	微味幽玄考★
5	儀式（規式解）★
6	発教録★
7	新井流易学皆傳秘書
8	古易奥義
9	相学記
10	人相奥義
11	血色口傳
12	墨色口傳
13	四神中央巻奥義
14	家相畳之敷様々口傳
15	神道鳴弦蟇目傳書
16	暦術口傳
17	二十八宿並的殺図
18	心得草
19	教導筋奉申上候★
20	廻文集　廻文★
21	為取替置一札★
22	請取一札★
23	長部村道友先祖株願書
24	差上申御請書之事
25	議定仕候以来の始末書
26	先祖株惣締高取調帳☆
27	字八石方田地有町分附米控
28	口まめ草★
29	諸君子句集☆
30	陸奥つれづれ草☆
31	性学日記☆
32	道の記
33	信陽道の記
34	玉の緒のかぞいろ
35	誓の元づな
36	子供大會日記抄
37	景物集☆
38	書簡集☆
39	配剤録抄
40	義論集☆
41	聞書集☆
42	神文及道友録
	＊全集未収録 道徳百話★ 道友列傳☆ 性理学実行評論☆ 上申書☆

※★は全書で収録、☆は全書増補版で収録されていた史料
※番号は全集掲載順

後半に該当している。

また、この菅谷家本「性学趣意」は、

序
凡例
性学趣意
以礼自ら立る微味
士
後編庶人を養ふ部

という構成からなるが、全集本ではおそらくこれを便宜的に前編（序・凡例・性学趣意）、中編（以礼自ら立る微味・士）、後編（後編庶人を養ふ部）として掲載したものと推測される。そのことを除けば、文章もほぼ一致することが確認できる。例えば原典で付箋か訂正箇所であったと推測される書き込みが、全く同じ体裁で活字化されていること、巻末の「天保七申末秋記　実生（花押）」も一致することなどが挙げられる。

そしてこの三冊それぞれの表紙には左下に「主又左衛門」との署名が入っている。

残念ながらこの写本のもととなった自筆稿本の存在は現在のところ確認できず、また他の完成稿も未見である。

2　残す言の葉集

「全書」六六三―六六七頁。全集二七―二三頁。これはその表題の通り幽学の文章を収録した短文集である。それぞれの短文は独立した史料として散見されるものの、他の幽学の著作類と同様にこれも下書きなどや、各短文ごとの史料は多数あるものの、自筆完成本の特定はされていなかった。

「高木千次郎補正」による「全書」と「全集」では若干内容に違いがみられる。「全書」では

一　三幅対
二　会合の席に係る二幅
三　生涯心得の事
四　禁事
五　性理微味の極
六　書置事蹟にあり略す

という構成。一方の「全集」は次の通り。

三幅対
会合の席に係る二幅
生涯心得の事
禁事
性理微味の乃極
廻文

廻文の末尾に「于時天保未年正月　日　幽玄堂静齋　道友中へ」とある。「全書」中では、「廻文」は「残す言の葉集」ではなく、後編部分の事蹟[51]のなかで紹介されている。「廻文」は主に農作業の進め方や心構えを説いたもので、後にいわゆる仕事割として結実する年中の作業予定表の作成をすすめる指南となっているものである。

「三幅対」についても末尾「年号月日残之静齋　花押」は「全書」ではなかった部分である。

「奉行所本」について

しかし最近、これに該当すると思われる貴重な史料を確認することができた。「奉行所本」といわれるものの存在である。

昭和四十八年（一九七三）に刊行された『日本思想体系52　二宮尊徳　大原幽学』にて、中井信彦氏が「奉行所本」についてふれているが、昭和五十年代に行われた明治大学の調査の際には所在が不明となっていた。

次に再発見されたのは、大原幽学記念館が平成八年の開館後、遠藤家の史料が調査、整理のために一括して運び込まれてからのことである。すでに目録化され整理済みの史料群と、膨大な未整理の史料群とがあり、再び明治大学木村礎グループによって調査されたのが平成十三年のこと、この時点でそれまで不明になっていた奉行所本が確認されるに至ったのである。

奉行所本とは包紙にひと揃いとなっている以下九冊の史料をさしている。

- ●規式解
- ●残す事の葉集
- ●発教録　種
- ●微味幽玄考　一ノ上
- ●微味幽玄考　一ノ下
- ●微味幽玄考　二
- ●微味幽玄考　三　弘化二巳十月十五日調
- ●微味幽玄考　四　弘化三午三月十四日調
- ●微味幽玄考　三　三分之一ニ御座候

この一括の九点を「奉行所本」とするのは、この包紙にある表書きに由来する。包紙には次のように記されている。

（表）

嘉永五子年ヨリ一件出来　同十月先生御差出二相成候節　本宅ヨリ御引上ヶ之書類之所

安政四巳十月廿三日　御奉行所ヨリ御下ヶ相成候分　先生御書類耳種本八冊也

（裏）

一件中、六ヶ年の間御奉行所ニ納り居　御下げの品ニより極大切也尤外数冊御下ヶ有之候得共　為後先生之筆耳残置リ

明治六酉七月六日改置事

「一件」とは嘉永五年四月十八日に起きた「牛渡村一件」のこと。関東取締出役の手先常州新治郡牛渡村の忠左衛門ら五人が、性学の教導所である改心楼に押し入るという事件である。

この事件については中井信彦「大原幽学[52]」、高橋敏「大原幽学と江戸訴訟[53]」、「大原幽学と改心楼乱入事件―「牛渡村一件」の真相―[54]」に詳しい。これによれば事件の経過は次の通り。幽学と門人たちが銚子本城村で関東取締出役の吟味をうけた後、五月には長部村領主清水家の取り調べが行われ幽学はじめ関係者も江戸へ出府している。そして出役から上部機関である勘定奉行所に差出になり、幽学が召喚されて出府したのが、この表書きにある嘉永五年十月にあたる。そして安政四年十月二十三日とは判決が申し渡された日[55]である。中井氏によれば、召喚された時に提出した「書類」は判決と共に証拠書類が返却され、幽学が長部村に帰村のさいに持ち帰ったものだろう[56]としている。そして幽学死後、十五年後の明治六年七月に幽学自筆の稿本八冊が選ばれ封をされたというわけだ。つまり、この八冊とは幽学の門人たちをしても重要と認識された書類だということになる。ただし、現在伝わっているのは表書きの八冊ではなく九冊である。いずれも装丁はなく、こよりで綴じた簡素な冊子本だ。奉行所提出の書類としておそらく最もよく知られている「教導筋奉申上候[57]」は、これには含まれていない。

さてこの奉行所本「残す事の葉集」は表紙に次のような付箋がついている。朱書きで「弐」と大きくあり、その下には「御奉行所ニテ御合印」と続く。この冊子が証拠書類として提出されたことを裏付ける。他の八冊には剥がれ落ちてしまったためか見ることはできないが同じような付箋があったと思われる。

この自筆稿本が底本かと思ったが、相違が幾つか挙げられる。奉行所

本は「三幅対」「会合の席に係る二幅」「生涯心得の事」「禁事」「性理微味の乃極」「廻文」に続いて、「全書」にも「全集」にも記載のない「道友議定誓約之事」「奥書」「再三」がおさめられている。「道友議定誓約之事」は非常に重要な史料であり、これとは別に独立したものとして掲載されたために、編集段階で割愛されたものとも考えられる。これについては次項で述べる。しかし全書で省略したとされる「書置」とは別のものである。

「全集」ではどうだろうか。「道友議定誓約之事」の省略を考えれば構成は同一だが、「三幅対」の末尾にある「年号月日残之　幽玄堂　静齋　花押」が奉行所本にはない。しかし、その点を除くと他の文章は一致するものとなっている。

これに該当する史料が一点確認された。菅谷家所蔵の菅谷又左衛門写しによる「残す言の葉集」[58]である。この写本は「性理微味の乃極」「道友議定誓約之事」「奥書」「再三」「廻文」という構成であるが、廻文結びの「于時天保未年正月　日　幽玄堂静齋　道友中へ」がない。

「残す言の葉集」は既に門人のあいだに流布していた短文や書を、より利用しやすい形として提供するために編まれたものである。「三幅対」をはじめ「会合の床に添る二幅」にあるいわゆる会席議定も掛軸として複数が残っており非常によく知られたものである。活字とする際に「残す言の葉集」ではなく個々に残る史料を元にしたとも推測される。奉行所自筆本、菅谷家写本をもとに編集されたのではないだろうか。

「残す言の葉集」所収の各短文についての出典は次の通りである。

■三幅対

この三幅対は独立した掛軸として残るものである。神道的な内容の一幅目、孔子『管子』からの引用による二幅目、そして門人への教えが説かれている三幅目から構成されている。書かれた年代は幽学指導の初期である天保九年（まれに天保十一年）で、一様に「大原幽学」の署名が入っている。文字通り三幅の構成のもの、また一幅に三つがまとめれたものもある。旧八石史料には四点の三幅対が伝来する。うち二点が三幅一組（IC2、3）、二点は一幅にまとめられたもの（IC4、5）で、IC5が天保十一年十月、他は天保九年一月である。「性学三ヶ村」のひとつ十日市場の林道一家に伝わる二点の三幅対も天保九年、三幅一対のものである。またそれぞれ単独としても作成されている。年号が確認できるもっとも早い時期の書は天保七年四月の規矩[59]（三幅目の「世の中に道たる事偏らざるものなれど……」）がある。

三幅目に「予が此の地を去って後……」と記述があることから、幽学が東総退去を決意した天保七年八月の前後に、門人たちへ遣わすために書かれたともいわれている[60]。幽学から「性学惣連衆中」宛に天保七年九月十三日付けで出された書簡があり[61]、これに「尤彼五幅と此二書は道を得る迄毎日ふくして可然候」との一文がある。「此二書」とはこの書状そのものと、同日付けで出された『連中誓約之事』の案文（次項「連中誓約之事」参照　書簡についても同様）、「彼の五幅」とは「三幅対」と「会合の席に添る二幅」を指すとされている。幽学には珍しい種類の文章でもあり、このことからも三幅対は初期性学の史料であるといえるだろう。

■会合の席に係る二幅

「全書」では「会合の床に掛る幅（会席の議定）」（六六五頁）、「全集」には「会合の床に添る二幅」（二八頁）という表題で収録のもの。二書とも若干の記述の違いがあるが、これを一点として取り扱っているという共通点が見られる。「全書」では「二幅」と書かれているにも拘らずである。正しくは「会席議定」と後半の四書五経からの字句からなる部分の二つに分かれている。まず奉行所本をみてみよう。「会席議定」は、上部に「会席議　定」と横書きされ、本文は会合の席上での心得が簡略に書かれている（本文については奉行所本の記述と「全書」「全集」の

ものは一致している)。また、この会席議定は「行状突合セ会席議定」として独立した掛軸が多数現存しているが[62]、この奉行所本「残す言の葉集」とは若干の変化が見られる。旧八石史料には自筆の三幅が残るが、短文でもあり以下に全体を記す。

行状突合セ会席議定

会席中　酒之酔人無用之事　并ニむだ口まくひかず　差出口　穴さがし　道友之外他人のうわさ無用之事　附り一人はつ言すれは一統静マリ　能々味ひ其善悪を分ヶ知り愈々其身丶丶の悪きを革ルの学ひ専一に候

天保九戌孟春革残之　　大原幽学（花押）

「会席議定」としては書は残っておらず、普及版として「行状突合会席議定」が定着していったと見られる。八石史料はすべてこの天保九年一月となっており、「三幅対」でも述べたように初期の成立を得て、その後門人たちの間で定着していった書の一つであるといえる。これとは逆に「会合の席に係る二幅」のもう一幅はその後登場しなくなっている。奉行所本にある

道者不可須臾離
不語怪力乱神

は、前句が「中庸」第一章、後句が「論語」述而篇の引用である。これは「会緒三幅」（旧八石史料ＩＣ６）と題された三幅のうちにだけ確認できる。「会合の席に係る二幅」の改訂版ともとれるこの「会緒三幅」、この書と「行状突合会席議定」と「積善之家必有余慶」（「周易」からの引用句）とで構成されているが、他に例はなくあまり登用されなかったものと思われる。これも天保九年の成立である。

■生涯心得の事　禁事

「生涯心得の事」「禁事」は本来同じ出典の史料から成っているためここでは一緒に取り扱うこととする。この心得は恐らく幽学の別の短文集である『心得草』にある「生涯心得之事」を元に書かれたと思われる。「全集」二三七頁にも註として「本編は『遺す言の葉集』中の『生涯心得の事』及び『禁事』と参照して読むを要す」とある。こちらが「元」であるとの理由は、『心得草』の方には「天保甲午夏残之　實生（花押）」との署名が付されていることにある。『心得草』もやはり各種の文章を収録して編まれたものであるから、その元になった文章が存在するはずである。残念ながら今回は現物を確認するには至らなかったが、文献上での史料確定をすることはできた。『史蹟名勝天然記念物調査第十六輯大原幽学先生関係書翰集』六九―七〇頁に収録の「生涯心得之事」（篠崎正樹氏所蔵　香取郡小見川町）がそれである。これには「生涯心得之事」「制禁」は一点の史料として収録されているのである。内容は「全集」にぴったりと一致する。ただし書翰集は「天保甲子夏」とあるが「全集」では「天保甲午」との訂正がなされている（天保年間に甲子の干支はない）。天保甲午は天保五年であり、この年は幽学が「性学」という語を使い始めた年なのである。この書簡中にも「性学」という語が登場しているが、つまり初期における幽学の書簡がこの心得の出典であることがわかる。やはり宛名は記載がないが、本文中に初期門人である殿部田村の南陽道人の名が見える。

「全集」の「残す言の葉集」所収の「生涯心得の事」は六箇条「制禁」三箇条から成っているが、奉行所本では「制禁」三箇条のみが箇条書きとなっている。書簡だったものが幽学自身の手で体裁を整えられ改訂されたものが「残す言の葉集」におさめられたと思われる。一方の『心得草』はよく知られた短文集であるが、これは後世、門人による編纂で成立したものでもある。それは奉行所提出本の中に『心得草』が入っていないこと、『心得草』には幽学自身の書でないもの[63]が混入していることにも表れている。今回、幽学の三つの短文集「残す言の葉集」「発教録」「心得草」のうち一つが漏れてしまったが、次回への課題としたい。

■性理微味乃極

性学についての心構えを記したごく短い文章である。これも幽学が自らの書状を改編して書いた短文である。出典は本田元俊宛の「性学微味」と題された書簡（旧八石史料ＩＩ１〈１〉）。年号の記載はないが、幽学が「實生（花押）」という初期の名乗りで署名していることから、やはり性学初期と考えたい。旧八石史料の書簡類で実生という署名は天保七年までしか見られず、以降は「静斎」「大原」「幽学」へと次第に移行していく。「全集」六三〇頁にもこの書簡は収録されている。

■廻文

これは農業の予定表のすすめを説いた文章で、いわゆる「年中仕事割」の指導について書かれたものである。残念ながら今のところ出典史料は確認できない。「全書」に「廻文集」（二六〇―二六三頁）というものが収められている。これは「幽学が道友一統、または最寄りの道友連へ宛て回覧せしむる為贈った文章五編を蒐集して「廻文集」と名付けたものである」。この五編のうち「残す言の葉集」の廻文は重複を避けここでは割愛されていることが解説で明記されている。「残す言の葉集」に収録されたものは「于時天保未年正月日　幽玄堂　静斎　道友中江」とあるため天保六年である。「年中仕事割」の指導は比較的初期に行われたことがわかる。同種の目的で書かれた「廻文」は他にもあり、幽学が門人への指導を書き送った回状は数種が現在も残っている。[64]

■道友議定誓約之事・奥書・再三

これは次項で述べる。

以上、「残す言の葉集」は性学初期、まだ微味幽玄考などの大著を著す以前、天保七、八年頃迄に成立したものを収録したものであることがわかる。

3　連中誓約之事

「全集」三四―三九頁。

全書本では事蹟に「道友議定の事」という表題でほぼ同内容のもの[65]が収録されている。これは幽学関係史料ではよく知られているもの。幽学が東総を退去する意向をしめし[66]、関西方面へむかったことを惜しみ、門人たちが幽学を引き止めるために門人一同が連名で誓いの言葉を述べた前半の部分（天保七年十月）と、これに対する幽学の奥書が後半である（ただし奥書と称されているだけで、幽学の書いた部分には「全集」にあるような「奥書」という表題はない）。これによって幽学は東総へとどまることを決意したという。冒頭の部分はいわゆる「性学十四ヶ条」とよばれているもの。

全集本の底本は旧八石史料のなかにある冊子「連中誓約之事[67]」である。この冊子の表紙裏には「天保七申十月連中誓約書　大原先生奥書有之分松澤組時分ヨリ宇井君ヨリ書類共附達」と書かれた付箋が貼られている。冒頭の十四ヶ条の三番目「賭諸勝負」は「諸勝負[68]」となっている。また「天保七年未十月日」付けの誓約文の後に続く門人の連名に爪印が添えられていることからも、これが原史料であることを裏付ける（ただし爪印のないものも数名いる）。門人九二名の署名は、記載順に殿部田邑（現千葉県芝山町）一名、足洗村（現同旭市）八名、松澤村組（現同干潟町）三九名、小見河連（現同小見川町）一九名、長沼村組（現成田市）二四名、そして最後に、再び殿部田村一名、飯倉村一名となっている。しかし原史料では「足洗村」の記載はない。編集時の加筆によるものだろうか。またこの署名部分はよく見るとその村ごとに別の人物の筆跡である。また料紙を見てもその文字の配置から、これが各村ごとに書かれ提出されたものを編冊した可能性が高いことがわかる。各村の間に一頁の空白があり、例えば冒頭の殿部田邑の一名だけで一枚の料紙が使われている。

またこれは、いわゆる先祖株組合の定款の役割をもはたしたものである。先祖株組合とは幽学の行った代表的な仕法のひとつ。中井信彦氏によれば、幽学が江戸から送った「性学同門中子孫永々相続講」の案文を、門人たちがこの提案を受け入れて契約に加わる意向をしめしたのが「連中誓約之事」であるとしている。[69] この案文は「全集」七三六―七三九頁、書翰集の道友連宛の項に収められているものに該当する。「全集」においてもその註で「本文は『連中誓約之事』の原文にして『連中誓約之事』はこれを改訂したものである」と記している。この同日付天保七年九月十三日で出された二通の書翰史料は、その内容からももともとは同封の書簡だったとも考えられ、その関連性から編者によりまとめて掲載されたものと解される。現在は前半が旧八石史料「幽学先生書翰」[70]に、後半が同じく「幽学先生之書」[71]に、別々の巻子に収録されている。前半部分は「此書惣連中の帳面の見えぬ所に張附置可給候」まで。後半部分は正しくは

性学同門中子孫永々相続講
連中誓約之事

ではじまる。

さて、この永続講が発展し先祖株組合へとなっていくのだが、組合を結成する際の提出書類については渡辺隆喜「先祖株組合と性学金融」[72]で詳しい。それによれば、[73] 組合に加入する際は「連中誓約」と「為取替置一札」からなる「道友議定誓約」に署名・爪印をし役所へ提出していたようである。

この様式の史料が遠藤家の「道友議定誓約一札」（天保十一年八月）、成田市荒海の吉岡家「道友議定誓約一札」（天保十三年十月）である。前者は長部村、後者は幡谷村での組合結成書類にあたる。吉岡家史料のものは冒頭の十四ヶ条が他とは異なり「十六ヶ条」となっており記述が具体的なのが特徴である。遠藤家史料は、冒頭は前述と同内容、それに続く内容は吉岡家と同じで、全集所収のものより短く簡潔な文章となっている。この部分については全書と内容が一致する。また同種のものとして年号を欠いた写しとみられる「道友除株積合控帳」[74]が、先祖株組合が組織され、金融担当をしていた諸徳寺村菅谷家にのこっている。

ちなみに「全書」に紹介されている「道友議定の事」であるが、これは日付が「天保六年九月」となっているが、幽学の日記の記述や前出の書簡からもこの日付はあり得ないため恐らく誤植かと思われる。

最後に奉行所本「残す言の葉集」に登場する「道友議定誓約之事」「奥書」「再三」を紹介する。「全書」にもこの三点が続けて収録されていることから、奉行所本、もしくはそれに類する史料を底本としたと推測される。以下、「全書」をもとに校訂したものを挙げる。

道友議定誓約之事
一公儀御法度始五人組前書被　仰渡之願急度可相守儀は勿論に候
一不義密通　一職行二重
一女郎買　一強欲　一謀計　一大酒
一訴訟発頭
一已倹約して人に損亡かけ間敷事
一疱瘡はやし或は厄除風祭神事祭礼念佛の願にかこつけたる誓手躍
　或は浄瑠璃長唄三味線之類人の心の浮るる所作
一産着祝ひ紐解祝ひ十五祝ひ或は日待庚申子安講の類ひにかこつけ
　酒宴美味抔一切催間敷事

右に記す所は勿論其外怪力乱神或は分に應せぬ儀并に奢ヶ間敷儀或は危き商危き身の行ひ等いたすにおいてハ子孫滅亡いたす所以の味ひ等を承知仕上は右躰無道乃行ひ一切仕間敷候　もし亦道友の内右躰行悪敷者有之節は急度可致諫言事
如欺致誓約上は私共もし右躰無道之行仕事於有之者何程厳敷御誡被

表2　連中誓約関連史料一覧

表題	年次	内容	署名	所蔵
性学同門中子孫永々相続講連中誓約之事 書翰集「幽学先生之書」所収	天保七年九月十三日	連中誓約之事（十四ヶ条含む案文）	幽学自身による定款案につきナシ	旧八石史料
道友議定誓約之事 「残す言の葉集」所収	天保七年九月	道友議定誓約之事（十六ヶ条含む全文） 奥書 再三	ひな型につきナシ	奉行所本（遠藤家）
連中誓約之事	天保七申十月 ＊奥書は天保八年春	連中誓約之事（十四ヶ条含む全文　署名・爪印） 奥書	殿部田邑二名、（足川村）八名、松澤村組三九名、小見河連一九名、長沼村組二四名、飯倉村一名　計九二名	旧八石史料
道友議定誓約	天保十一年八月	道友中誓約之事（十四ヶ条含む全文） 為取替置一札之証（署名・印ナシ）	長部村一〇世帯五七名（女性子ども含む）	遠藤家
道友議定誓約一札	天保十三年十月	道友中誓約之事（十六ヶ条含む全文） 為取替置一札之証（署名・世帯主は実印、他は爪印）	幡谷村一四世帯五四名（女性子ども含む）	吉岡家
道友除株積合控帳	年欠	道友中誓約之事（十四ヶ条含む全文） 為取替置一札之写	ナシ	菅谷家

下候共御受申急度相慎可申候　万一其御誠相背或は浮かれ或ハ激し
抔して右ヶ条之内ならずとも被致無道行御人は致見捨二も亦相互之
事二候　時分ニテも亦於致無道行は相見捨被成　子孫迄も滅亡候共
是全自ら作せるハ御見捨之儀少も御怨申間敷候議定誓約仍テ如件

天保七年
申九月日
何村
誰爪印
・・・・・・・
・・・・・・・
何村
誰爪印
・・・・・・・
・・・・・・・

時于天保六未乃如月余一度此地を去ル其後下総道友一統相談の上議
定爪印せし由江戸表へ申送り是に奥書を乞余則悦て奥書するもの也

奥書

民なる者万々歳名全くする事の及ひ難き所以ハ常に演へたる所也
堯舜文周乃後すら暗君の代となりてハ亡ひたり況や我等如き者言を

残すとも書残すとも各々か々孫々を何ソ有タしむる所以あらんや嗚呼定め無きハ世のならひなり　然レ共余か常に語る我朝には万代不易の御法り有り且今天下泰平乃御代なれハ各々志によつて永続の法則立へし　其所以は聊五人か十人の家内の者を修る身分故各々我朝の御法りを慕ひ奉りて道の為に功有る人の子孫ハ何さまよろしからすとも我子に替ても信を盡し導く事相互ひにすへし　其互ひにする事三世乃中廃セされハ則其家名永続の法則と成ルへし　然共其三世の中を廃セさるには先ツ面々乃子を育つるに道友の言ハ微しも背く事はならぬものなりと思ふに育て置かすむハあるへからづ故に必先ツ己レに道友乃言ハ微シも背かすして日々是を見セて以て子を育てへし　しかして以て議定誓約を能守り三代を過き是を四代に押移さハ則永続と成るへし　亦世乃人は四代乃中の危からさるを以て議定誓約を守る道友多く成るへし以て万々歳家名全かるへし庶人において是にまさる孝行あるへからす

是等の法則も消滅する所以の多き事数を知らす然共其あらましを以て万通すれハ掌を指すか如くに悉く能知れる也　故に其あらましを記すものなり　必ず怠り無く常に事変に能押て知るへし

第一には自分の身代を自分の好き勝手にする事　次にハ各々議定する所のヶ条也　又世に秀てたる富貴とならハ極て危しき無くとも当時慢学発向故各々か子孫にも書を能読者出てもし慢学に移らハ聖人の語をもて我意を演へ抔果して法則を失ふ事もあるへし　是等の類ひ証拠を以て常に伝へ置きたる事故予か無き後道友の宿会には必々其衆説を以て予か一人の言ハを択ふへし　然るにおいては其極は予か十倍の智慧はる也試し有り故に必々微しも我意を用ふる事勿れ必議定誓約を堅固に守りて是を三代後に自然と押移の外念ふ事勿レ疑ふ事勿レ惑事勿レ

世上に所謂傳授の微妙といふハ何れも皆常の言に有る者也　故に予か常に語りし事毎を以て極むへし

再三

予が常に云ふ各々か今思所ハ其子孫生涯思ふ事の種と成る也　然ハ事ハ替といへとも意は其子々孫々の心に其儘に伝る也　自分の身代も自分の子供も自分の好き勝手にならぬこそ極て永続の原也

奉行所本の一条目は他の史料では例がなく、裁判提出用に付け加えられた項目とも読み取れる。尚、連中誓約に関連する史料の一覧を挙げた(表2)。現存はしないものの、恐らく組合が結成されたといわれる九ヶ村[75]では同様の書類が作成されていたのではないだろうか。

4　微味幽玄考

「全書」前編一―八一頁。「全集」四〇―一四二頁。「全書」では「分相応」(一四七―一七五頁)が独立して収録されている。いわずと知れた幽学の主著である。この大著については、中井信彦『日本思想体系52　二宮尊徳　大原幽学』の成果がある。これには「微味幽玄考」と「義論集」が収められている。そして解説である「「微味幽玄考」と大原幽学」において、この著については徹底的な史料確定がされており非常に信頼のおける内容となっているため、この項の詳細はこの書に譲りたいと思う。その概略を以下に記す。

「全集」の解説[76]には次のようにある。

「幽学乃ち第五巻以後に記述すべかりしところを要約して『子育編』を筆し、且つ会て草せしところの古三巻及び『議論集』全四巻と合わせて九巻と為し、自ら手製の帙を作り、表に『八石種本』と自著して後に遺た。今八石性理学会に伝るものは則ちこれであって」(＊後略)

そして、この「八石種本」を底本とし、古三巻を「子育編」にならって「分相応編」と名付け、全六巻、つまり一上下、二、三、四、子育編、分相応編（古三巻）という構成で収録されたとある。

中井氏はこの種本を「遠藤良左衛門亮規の手であると認められ」写しであることを当時の八石性理学会に赴き確認されている。この時既に、分相応編である古三巻は発見されず、また現在にいたってもその所在は確認できていない。残念なことに、その「八石種本」も現在は所在が不明となっている。

中井氏が採用したのが前述の「奉行所本」である。一ノ上、一ノ下、二、三、四を奉行所本より採用している。そして奉行所本に含まれていなかった子育編は、八石史料の巻子「性学幽玄考六古調下タ書」[77]と「幽玄考古キ調下書数々」[78]「微味幽玄考三古ル調并古調下タ書、尋可来名前書、信州大地震記」[79]の幽学自筆稿である三巻を底本としている。

そして当時すでに原本が見あたらなかった分相応編（古三巻）である。「全集」解説[80]で「本書は『八石種本』底本とし、東京女子高等師範学校教授文学博士石川譲・千葉県香取郡古城村寺嶋慶一・千葉市市原照及び長野県佐久郡小諸町小山栄助等諸氏の所蔵本に拠りて厳密に校訂し」と書かれている。中井氏は最終的には故石川謙氏が筆写した「微味幽玄考古三」による原稿と、奉行所本のなかの分相応編の冒頭に相当する「三分之一ニ御座候」とかかれた微味幽玄考三をもとに、底本として採用している[81]。

現在の旧八石史料には自筆の「微味幽玄考」完成稿は存在しない。幽学自筆の書簡・草稿類はある時期に貼りまぜて巻子仕立てにされて伝来されてきた。前述の中井氏が子育編として採用した巻子もこの中の一部である。「全書」巻末にある明細目録にすでに記載がみられるところから、この編集以前にすでに現在の形に仕立てられたのだろう。この巻子の二十巻[82]が微味幽玄考もしくはそれに類する著作の草稿である。「性学趣意」→「性学微味考」→「性理学幽玄考」→「微味幽玄考」という過程でこの著が成立したと中井氏は指摘している。

旧八石史料のなかで、浄写本といえるものは現在二種類が伝っている。一つは文久二年七月、高弟である諸徳寺村の菅谷政俊（幸左衛門）によるもので、一（上下）～四、子育編からなる五冊[83]。これは統一した表装が施された体裁のもっとも状態の整った浄写本である。

二つ目は、同じく諸徳寺村の菅谷又左衛門による一（上）（下）～五からなる六冊。第五巻表紙には「子育テノ部」とある。一ノ上の巻末に「明治元辰年初寒写」、第三巻の表紙には「弘化二巳十月十五日調」とある。こちらは、全冊揃ってはいるが、朱書きの書き込み、多量の付箋が認められる。

実はこの「微味幽玄考」は「全書」の底本となった浄写本であると思われる。その根拠はその朱書きの書き込みと付箋にある。筆による朱書きの加筆訂正部分は、そのまま「全書」の内容とぴったりと一致するからだ。例えば、「全書」中の「第一章　総論」にはじまる章立て、「第四章第三項武士道は神代より伝来したる御法の道なり」といった項目や節も、全てこの加筆によるものである。年号や「又左衛門主」「菅谷荒辺田[84]」といった署名部分には線が引かれたり「印刷ニ及ハス」との指示もみられる。つまりこの冊子をそのまま用いて校訂を行った跡がはっきりと確認できるのである（おそらく「全書」編執筆者である高木千次郎か）。

いずれにしろ「八石種本」と「古三巻」の所在が明らかになることが待たれる。

5　規式解

全書本には「儀式」として掲載。後編六六―七八頁。「全集」一四三―一五三頁。正月の食事や飾り付けなどを解説したもので、「全集」に

よれば「普通の歳時記に記せるものとその趣を異にして、国民的倫理的価値に重点を置きて説けるは、幽学独特の解説」。「全書」「全集」とも同一。正月についての前文に続き、式日、雑煮式、締縄、鏡餅、竹、樫炭、橙、譲葉、鳳尾草、昆布、島海老、田作、七草目録、七草の規式、十五日規式の項目があり、その意義役割について述べられている。

この底本は残念ながら未見である。以下に現存史料を挙げたい。まずは奉行所本からだが、この表題は上貼りで「規式解」となっているが、用紙裏から元の表題である「義式解」が確認できる。他の稿本でも「義式解」との表題のものが残っているが、成立当初はそのタイトルだったものと思われる。ただし「全書」のような「儀式」としての史料は現存しないので、これは編者によるものと解される。因みにこの表現については、表題だけでなく本文中でも、初期に書かれたものと推測される稿本、下書きなどは規式ではなく義式となっている。さて記述については若干の文言の違いもあるが、最も大きな相違は最後に「組重」「菜の物」という項目が続いていることである。以下に未掲載の全文を記す。

組重

酢牛蒡　数ノ子　田作煮付　煮豆

是を重箱一組に詰置き五ヶ日の中客人来れハ屠蘇の口取にすへし

尤家内の者も是を用ひ正月中客人の吸い物は雑煮也

菜の物

牛蒡　人参　大根　黒竿　焼豆腐

此の五品を煮付置き客人の膳分も家内の者も平に是を盛ル也

是高百石め以下三十石め以上の株の者家例とすべし　三十石め以下は是を半減すべし　無株の者ハ組重無し菜ばかりを吉事とす

正月規式は上々方抔にも食るる物も飾り物も皆農民の用ひる品々のみ也　然れハ農民はなを少しにても奢の意有レハ既に天符を蒙るへし　必々爰中にて規式する事なかれ

この部分は他の稿本にも見られる。旧八石史料のなかでは、奉行所本と同内容の写本による完成稿[85]が伝わっているが、これも同様にこの二項目は登場している。諸徳寺の菅谷家には明治期の写本「規式解」「義式解[86]」の二冊があるが、やはりこの二項目はある。同じく菅谷家に「正月元旦之規式」（これも「義」を訂正した跡あり）という表題の史料がある。これはほぼ規式解と同じ意義で書かれた恐らくその前段階の書である。内容も規式解の記述を簡易にしたものでほとんどが重なるのだが、これにはこの二項目は登場しない。同種のものが書かれた可能性はあり、つまり「全集」「全書」の底本となった稿本も存在していた可能性が見いだせる。しかし編纂時にこれら複数の稿本のうちいずれかは確認しえたのではないかと思われ、やはりこの部分が何故収録されなかったかは判然としない。菅谷家の「規式解」は「明治二年霜月　手習所」との署名が入っており、幽学のこうした著作に類したものを没後も教本として使用していたことを示す史料でもある。

6　発教録

「全書」前編一八七―一九八頁。「全集」一五四―一六三頁。

「全書」の全体を通してみられる編者による独自の章立て以外は、「全書」「全集」共に一致する。

これも「遺す言の葉集」同様に短文集であり、家内没落の種九ヶ条、上方・関東の違いを述べた文章に続き、性学の心得を箇条書きにまとめたものである。この「発教録」も他の著作類のように、後世の門人による写本が数冊伝わっている。

奉行所本にある自筆「発教録」をのぞけば、自筆の完成稿はなく僅かな下書き[87]が確認されている。千葉県内務部編『大原幽学』によれば「発

表3　家の不和・没落要因の比較

「分相応」	強欲	淫犯	飲酒	遊楽									
「発教録」		色欲			慢心	薄情	吝嗇	疑惑	愛溺	屓吝	浮気		
「微味幽玄考」					我慢		吝嗇			負惜		放蕩	惰弱	柔弱	未練

＊『二宮尊徳・大原幽学集』二四五頁より

教録は、幽学の思想を見るに便宜なる語録なれども、多くは散失し、残れるものは巻五のみなり」[88]との記述がある。つまり他にも、少なくとも四巻までが書かれたか、もしくは構想されていたことが推測される。いずれにしろ、「全書」増補版の編纂時にはこの「五ノ巻」のみだったのだろう。後世の写本もこれ以外は見あたらない。「全集」には「五巻」の表記すらない。現存する稿本の冒頭が「五ノ巻」ではじまるものがあるのはこのためと考えられる。年号が記載のものは現在のところ見当たらず成立年代は不明である。本文の中に「然れども議定誓約抔に一旦は命をも惜まざる勢ひなれども」とあることから、議定誓約が出された天保七年以降だと思われる。

「全集」の発教録を例にとってみよう。「家内破と成る種の有り。また破とならずとも没落する種多し。是を九箇條に縮める」にはじまり、「慢心　薄情　吝嗇　色欲　飲酒　疑惑　愛溺　屓吝　浮気」と、それに続き関東、上方の気質についての文章がある。この部分はどの稿本も記述が一致する。では「発教録」の大部分を占める後半はどうだろうか。性学の教えが書かれた後半部分は、「全集」「全書」のなかでは八十三箇条を数えることができる。

一方、「発教録　種」と題された奉行所本はというと、「全集」と比較すると奉行所本は四箇条多い八十七箇条、つまり八十三箇条は全く同じ内容だが、各所にそれ以外の条文が挿入されている。「全集」本の八十三箇条を番号とし、それぞれの記述を挙げると以下のようになる。

●一（女子小人抔を近づけて…）の前
　○己レに勤ルハ人を導く本原也
●七十四（親の悦ぶ顔を見るを楽みとするは…）と七十五（極寒に地中の温なるは…）の間
　○親を売て喰ふ鬼子有り子を売る有り
　○心ハ太極ナレ共気を以て偏と成る
●八十三（子育上の精を受たると…）の後
　○定悪ほれのヶ条知らす

また、「全集」でいえば、二十箇条目にあたる部分のあたまに「消長論序」との記述がみられる。これは奉行所本だけにある記述である。

「全書」「全集」に最も近い記述の史料が、千葉県立中央図書館所蔵の「発教録」[89]である。冒頭に「五ノ巻」とある以外は記述、改行、段落構成が一致し、これを底本とした可能性が高い。千葉県立中央図書館所蔵史料は遠藤亮規の手による写本が多く、これも体裁などから判断するとおそらく遠藤のものだろう。中央図書館本は「全集」より二箇条が多くなっている。これは、奉行所本の七十四―七十五の間に挿入されている二つと同じである。

他の写本は次のものがある。菅谷順司家蔵の「発教録」[90]は慶應三年神無月の写本で中央図書館本と同一。遠藤三男家蔵の「発教録　完」「発教録」[91]、は、五巻の記述はなし。「全集」で登場しない二箇条（○親を売て喰ふ鬼子有り子を売る有り、○心ハ太極ナレ共気を以て偏と成る）が

一箇条としてまとめて記載されている以外は、やはり中央図書館本と同系統のものである。この省略された二箇条は相応しくないとの判断で編集者が欠落させたとも考えられる。[92]

この「発教録」の成立は比較的初期であるといわれている。木村礎氏によれば、上方と関東との比較は、多分幽学が関東に入って間もなくのものであるだろうし、「発教録」には「性学趣意」のメモ的な要素があると指摘している。「発教録」の冒頭の箇条はよく知られた「性学十四ヶ条」として知られる「連中誓約之事」を連想するが、その記述ともまた性質を異にしている。幽学の案文である連中誓約には「博奕　不義密通　諸勝負　職業二重　女郎買　強欲　謀計　大酒　訴訟発頭　誓或は手踊・浄瑠璃・長唄・三味線之類　人の心の浮かなる所作」[93]とある。これにはより具体的な行動が書かれている。この性学初期の「連中誓約之事」（天保七年十月）よりも以前のような印象を受ける。

思想、内容についての言及は本旨でないが、『世界教育宝典　二宮尊徳・大原幽学集』では、家庭の不和・家の没落を招く原因についての記述を比較しているので紹介したい（表3参照）。それによれば、「分相応」が主として非道徳的な行為に、「微味幽玄考」が精神の態度に、それぞれ家の没落原因を求めているのに対して、「発教録」はその中間的な位置づけに属するとしている。[94]これでいえば「連中誓約之事」ははっきりと行為主義であるといえる。「発教録」は、精神性の「微味幽玄考」、具体的な処世態度である「連中誓約」へと繋がる通過点で生まれた書であるといえる。

おわりに

以上、奉行所本として伝わるものを中心に史料的確定を試みた。一部への偏り、誤り、追跡不足は筆者の力の及ばぬところであり、この後の研究、発見を待ちたいと思う。本稿がそのためのいくばくかの足がかりとなることを願いたい。

註

(1)「大原幽学と改心楼乱入事件―「牛渡村一件」の真相―」七一頁。

(2)『歴史科学と教育　第一八号』所収。

(3)写真や遺品類などの解説も後の幽学研究に大きな影響を与えており、以後のこうした解説のほとんどはこの書籍を根拠としている。

(4)「全書」にある「性理学実行評論」「山崎氏の検査書」などの没後の有益な資料が含まれている。

(5)「全書」のなかで幽学の仕法の一つである正条植についての解説で「幽学翁の正條植の方法は概して実地に就て教へたるものにして別に書き残したるもの無ければ其詳細を知るを能はず故に今其子孫の口傳説に基き其の大略を記さんとす」（後編一九頁）とある。こうした性格を全書は内包している。仕法の行われた年代についても誤りがわかっている。しかし、正条植の図（「全書」後編二三頁）や耕地整理の略図（後編一三頁）などよく参照される図版もみられる。

(6)木村礎氏「性学仕法の基礎的考察」（『駿台史学』四一号）、松澤和彦氏「大原幽学日記（全集本）の検討―特に『道の記』『性学日記』『口まめ草』について」（『駿台史学』四一号所収）、松丸明宏氏「大原幽学の教育実践―日記の分析を中心として」

(7)木村礎編『大原幽学とその周辺』（八木書店）二〇頁　以下『周辺』とする。

(8)『ひかたの歴史と民俗』第四号　大原幽学記念館／千潟歴史民俗研究会

(9)本拠地長部の門人たちが中心となり、幽学の顕彰と農事改良の奨励指導と遺跡の永久保存を目的とし、明治四十年二月二十七日内務大臣の認可を得て財団法人八石性理学会を設立。これは内部での派閥抗争や時代の変化による必然的な帰結とみる。八石（はちこく）とは幽学が住んでいた長部村の字名をとったもの。この稿を執筆している現在（二〇〇三年四月）、同会はその役目を終えたとして解散の方向で話し合いがすすめられている。

(10)『周辺』木村礎氏、藤田昭造氏による「第四編　幽学没後の東総社会と性学の動向」に没後の状況が詳しい。

(11)明治四十三年本の田尻稲次郎氏による序は明治四十三年八月。奥付にも再版の文字は見られない。これとは多少異なる内容だったと推測されるが残念ながら未見。

(12)大原幽学記念館蔵。目録番号ＩＨ１。以下記念館所蔵史料については『大原

幽学関係歴史資料調査報告書』の目録番号を付す。

(13) 大原幽学記念館蔵。目録番号Ⅱ4。

(14) 『周辺』九頁。

(15) 幽学の記事は下巻七六一―七八一頁部分。

(16) 同書二頁。

(17) 「夫性の大ひなるや天地の和則性　性則天地の和にして其儘なる者也　其土々々によりて形気も風も異るといへとも北極星の見る国も南極星を見る国も天地の和をする所以の者亦同じ」に相当する。

(18) 開催期間は昭和十二年十一月一日から十一月七日の七日間、千葉県図書館を会場に開催されている。同書一〇頁のはしがきより。

(19) 「大原幽学先生の事に付祖父　本田俊泰より伝聞したる事共」三―九頁。この祖父とは、幽学の門人の中で学頭と称された高弟の一人、長沼村の医師本田元俊のこと。幽学自殺のときの話題など興味深い。

(20) 一二件とは、例えば「五　巻物　書簡十通　一」や「　」など出品目録の番号を件数としたもので、点数とは異なる。巻子などに多数貼りこめられているようなものは点数の記載がないため件数によった。もっとも多い点数の出品物は「七八　巻物　書簡一、二、三、四、五、六、七箱入　七」と書かれたもの。この巻子仕立ての書翰集は林家に現存するが、一巻に数点から三〇点近くの書状が収められているため点数が多く、「書翰集」にも「林金之助氏」所蔵のものが大きな割合をしめる。この林家とは「性学三ヶ村」のうちのひとつ十日市場村の高弟名主林伊兵衛家である。林金之助氏は伊兵衛の孫に当たる。

(21) 『大原幽学研究』四頁の序。

(22) 『周辺』一六頁。

(23) 同　一六―一七頁。

(24) 旧八石性理学会所蔵。現在は大原幽学記念館蔵。神文はもともと一通ずつ独立したものだったが、現在は「神文綴帳」にほぼ年代毎に編冊されて全三七冊が伝わっている。『大原幽学関係歴史資料調査報告書』の目録番号ⅢC全て（神文六一八通）と、ⅣC全て（神文一三〇〇通と神文調実記一一冊）。

(25) 『日本歴史』第322号所収。『郷土文化』（名古屋郷土文化会発行）にも関連論考多数。

(26) この水谷氏の論考をはじめ、大道寺家説をふくめ現在では出自は断定不可能とされている。中井氏『大原幽学』一―一七頁、木村氏『周辺』三八―五三頁参照。

(27) 名古屋市鶴舞中央図書館所蔵、整理番号市九―一―六七。同館には他にも「八石伝来之記　大原幽学履歴誌　道のかこみ　合本」（明治四十三年の写本）などがあるが、いずれも八石史料に同種のものがある。

(28) 名古屋市蓬左文庫所蔵、整理番号一四六―一九六。

(29) 『一宮市史　資料編八』五七八頁。

(30) 松澤和彦「高松家と大原幽学」『歴史論』八号。尚、同氏は多年にわたり高松家をテーマとしていたが、発表を待たずに急逝したため、その成果は研究発表と遺稿をもとに、木村礎氏により「松澤和彦「高松家と大原幽学」および同「補正」について」（『ひかたの歴史と民俗』四号所収）にまとめられている。

(31) 東京都立中央図書館所蔵。

(32) 大原幽学記念館蔵。目録番号ⅣK4―12。

(33) 同　目録番号ⅢM23。

(34) 「大原幽学門人椎名琁蔵と性学飯倉組」『思潮』二〇号所収。

(35) 遠藤家所蔵。目録番号O3。

(36) 遠藤家所蔵。目録番号O8。

(37) 『学習院大学紀要』第八号所収。一八七―二五〇頁。

(38) もとは小野沢家文書。柏木家は幽学が滞在していた小野沢家と後世に縁戚ができ、同家に移ったもの。尚、柏木家文書は国立史料館に所蔵されているようだが（史料館所蔵史料目録第四十五集『信濃国佐久郡御影新田村柏木家文書目録』（一九八七））、幽学関係のものは柏木家の手元に所蔵されているという。同書一八八頁。

(39) 高木由起夫家所蔵、目録番号1―58。途中抜け落ちたと思われる年次もある。この他に大正、昭和期の五冊が現存する。

(40) 『香取民衆史』7（香取歴史教育者協議会　平成六年八月）所収。

(41) 『千葉県史研究』第2号（千葉県　平成六年三月）所収。

(42) 大原幽学記念館蔵。目録番号ⅢK―2。

(43) 『大原幽学―幕末の農村指導者』（千葉県立大利根博物館／干潟町教育委員会平成八年三月）所収。

(44) 内山朝治氏校訂。平成十一年六月　本郷書房。

(45) 「全書」前編八七―一四六頁。

(46) 「全書」前編一四七―一八六頁。

(47) 「全書」田尻稲次郎の序文。

(48) 「全書」後編三五一頁。

(49) 『大原幽学関係歴史資料調査報告書』（干潟町教育委員会発行　松澤和彦氏校訂）一一―一二頁。

(50) 菅谷順司家所蔵。目録番号O3冊38。

(51) 「全書」後編二六頁。

(52) 吉川弘文館　人物叢書104（昭和三十八年四月）。
(53) 『歴史学研究』七一七号所収。
(54) 田中彰編『幕末維新の社会と思想』（吉川弘文館）所収。
(55) 中井信彦『大原幽学』二六四―二七二頁。
(56) 中井信彦『日本思想体系52　二宮尊徳　大原幽学』の「「微味幽玄考」と大原幽学の思想」四四七頁。
(57) 改心楼乱入事件において、嘉永五年六月、関東取締出役の取り調べにあたり提出されたもので、性学の成り立ち内容について述べられ、これに言及した研究も数多い。「全集」二五二―二五八頁。重要書類として位置づけられており下書、控え、写本は多数現存する。旧八石史料のなかだけでも、自筆清書一点（ID2「全集」底本はおそらくこれ）、下書二点（ID3、4）、写し二点（IIID6、7）がある。
(58) 菅谷順司家所蔵。目録番号O3冊7。
(59) IC1。
(60) 『二宮尊徳・大原幽学集』（下程勇吉・久木幸男編）二三三頁。
(61) 大原幽学記念館蔵。目録番号II2（3）。
(62) 幽学の書が遣わされた記録に「遺書授名録」（IIIN15）があり「会席議定」はその数も多い。この分析については『周辺』一〇二―一〇五頁に詳しい。
(63) 「男女の心得」は二代目教主の作であるとされる。『周辺』一〇九頁、木村礎氏の指摘による。
(64) 全書の「廻文集」の四編のうち、「亥十一月廿七日」付は目録番号II4（1）、「寅正月十六日」付は目録番号II29（9）。後者は諸徳寺の菅谷家に廻状を写しとったものが二通存在する。またこの廻文集に未収録の廻文（菅谷家　O2―166　七月廿九日）は幽学が流行病の注意を各村に書き送ったものだが、幽学による本文に加えて伝達先の各村名、順序が記載されており廻状の利用状況を伝える史料である。
(65) 「全書」後編五―八頁。
(66) 「全集」四〇七頁「口まめ草」の天保七年の記述に「八月はつかた一の宮に居ければ、琁蔵ぬしと本蔵ぬし未の刻迎ひに来れり。即刻出立して明る未の刻飯倉村琁蔵ぬしに至れば、宇井・南陽・本田・千本末・菅谷・檜垣の六人待居給ひて、明る早々より夜更に至るまで道の談話して、僕は上方へ帰るとて別を告て立出でけり」とあるのを指す。
(67) 大原幽学記念館蔵。目録番号ID1。
(68) 後述の吉岡家所蔵本では「賭諸勝負」となっている。
(69) 中井『大原幽学』九二―九四頁。
(70) 大原幽学記念館蔵。目録番号II2（3）。
(71) 同　II28（2）。
(72) 『周辺』所収。
(73) 同　一六九―一七〇頁。
(74) 菅谷順司家所蔵。目録番号OII123。
(75) 渡辺「先祖株組合と性学金融」『周辺』一六九頁。それによれば史料が残る長部村、諸徳寺村、幡谷村の他には荒海村、長沼村、十日市場村、桜井村、岡飯田村、信州小諸を指す。
(76) 全集　四〇頁。
(77) 大原幽学記念館蔵。目録番号IB3。
(78) 同　IB7。
(79) 同　IB2。
(80) 「全集」四〇頁。
(81) 中井『日本思想体系52』四四九―四五一頁。
(82) 大原幽学記念館蔵。目録番号IB1～20の二〇点。
(83) 同　II2。
(84) 「荒辺田」とは菅谷家の屋号。
(85) 大原幽学記念館蔵。目録番号IIIA5。
(86) 菅谷家　OI18。
(87) 八石旧蔵史料のなかの「発教録」IB18は下書きの僅かな断簡のみ。
(88) 千葉県内務部編『大原幽学』一四三頁。
(89) 「千葉県郷土資料総合目録」（千葉県立中央図書館　昭和四十八年三月発行）の2389「大原幽学先生関係文書」の22。
(90) 菅谷順司家OIII46。
(91) 遠藤三男家1a26、1a27。
(92) こうした意図的な欠落は「全集」「全書」に見られる傾向。松澤氏は「大原幽学日記の検討」の中でも、日記の欠落部分に言及して「いかがわしい内容だと」みての処理だろうと述べている。
(93) 目録番号ID1。
(94) 『二宮尊徳・大原幽学集』二四五頁。

（大原幽学記念館、国立歴史民俗博物館共同研究員）

（二〇〇三年五月二十三日受理、二〇〇三年七月十八日審査終了）

大原幽学関連参考文献目録

■図書（論集・全集・叢書・単行書）

凡例

・自治体史は原則として省いた
・文学、小説類、児童書は省いた

No.	編著者	タイトル	発行	年号	西暦
1	高木千次郎	大原幽学事績 （再版）明治四三年一〇月　八石性理学会	八石性理学会	明治四〇年	一九〇七
2	田尻稲次郎編	幽学全書 （再版）大正二年八月　同文館	同文館	明治四四年七月	一九一一
3	千葉県内務部編	大原幽学 復刻版　昭和六三年一一月／一九八八　大原幽学先生奉賛会	多田屋書店　雙文館	明治四四年九月	一九一一
4	田尻稲次郎編	大原幽学　道徳百話	愛知県農会	明治四四年一〇月	一九一一
5	高木千次郎著 田尻稲次郎閲	大原幽学翁　先祖株及費組合	八石性理学会	大正元年一一月	一九一二
6	八石性理学会編	大原幽学書簡集	静岡民友新聞社	大正二年六月	一九一三
7	八石性理学会編	口まめ草	八石性理学会	大正二年一〇月	一九一三
8	山路彌吉	愛山史論	大元社	大正二年一一月	一九一三
9	岩橋遵成	大日本倫理思想発達史　下	目黒書店	大正四年二月	一九一五
10	田尻稲次郎・松崎蔵之助共述　八石性理学会編	新富国論	克禮堂書店	大正四年六月	一九一五
11	田尻稲次郎編	道徳経済調和之大恩人農村経営上未聞之偉蹟　幽学全書　完	大正書院	大正六年四月	一九一七
12	上村勝弥編	大日本思想全集14　二宮尊徳・大原幽学集	先進社　同刊行会	昭和六年八月	一九三一
13	大西伍一	日本老農伝 改訂増補　農山漁村文化協会　昭和六〇年三月	平凡社	昭和八年三月	一九三三
14	飯田傳一	大原幽学の事績 復刻版　昭和一六年／一九四一　刀江書院	東興社　財団法人八石性理学会	昭和九年五月	一九三四
15	長戸路政司	大原幽学の本領	関東学園出版部	昭和一〇年一二月	一九三五

16	奥山市松編	千葉県図書館叢書11輯　贈正五位大原幽学先生	御成婚記念　千葉県図書館	昭和一二年一一月
17	塚本平和編	大原幽学翁八十周年祭献詠集	八石性理学会	昭和一三年八月
18	高倉テル	大原幽学 「大原幽学傳」（新版）昭和一六年九月／一九四一　アルス 「大原幽学」タカクラテル　理論社　昭和二八年一一月	東邦書院	昭和一四年一月
19	奥山市松編	史蹟名勝天然記念物調査〈第16輯〉大原幽学先生関係書翰集	千葉県	昭和一四年三月
20	高木千太郎	大原先生創立ノ先祖株組合	（自家版）	昭和一四年一二月
21	菅原兵治	東洋治郷の研究	刀江書院	昭和一五年一一月
22	後藤文夫	大原幽学を語る　国民自覚叢書10	日本文化中央連盟	昭和一六年五月
23	中和国民学校編	大原幽学言行録	刀江書院	昭和一六年
24	野村兼太郎	江戸時代の経世家 改訂　近世日本の経世家　泉文堂　昭和一八	ダイヤモンド社	昭和一七年四月
25	千葉県教育会編	大原幽学全集 複製版　昭和四七年一〇月　千葉県郷土資料刊行会	社団法人千葉県教育会	昭和一八年一二月
26	鴇田恵吉	大原幽学選集	読書新報社出版部	昭和一九年四月
27	藤森成吉	藤森成吉全集　第一部　歴史の河　第9巻	小峰書店	昭和二二年一二月
28	飯田伝一	大原幽学先生	洋々社	昭和二九年六月
29	越川春樹	農村の師　大原幽学	明徳出版社	昭和三〇年七月
30	越川春樹	大原幽学	八石性理学会	昭和三〇年
31	大山澄太	大原幽学物語	米本図書館	昭和三一年五月
32	大原幽学百年祭奉賛会	大原幽学	干潟町役場	昭和三一年
33	大野政治	成田市域における大原幽学の研究	大野政治	昭和三二年八月
34	越川春樹	大原幽学研究 （再版）昭和五三年一二月／一九七八 発行　大原幽学百二十年祭記念　大原幽学顕彰会	大原幽学百年祭　理想社	昭和三二年一一月
35	若林　誠	信州における大原幽学の教学について	（謄写版）	昭和三七年
36	中井信彦	大原幽学　人物叢書104 新装版　平成元年六月／一九八九　吉川弘文館	吉川弘文館	昭和三八年四月
37	下程勇吉・久木幸男	世界教育宝典　日本教育編　二宮尊徳・大原幽学集	玉川大学出版部	昭和四一年二月
38	奈良本辰也編	日本の私塾	淡光社	昭和四四年八月
39	岩井弘行	旧足川代官岩井家の歴史	岩井弘行	昭和四五年三月
40	正月定夫	大原幽学—その人間像と教育思想	以文社	昭和四八年五月
41	奈良本辰也・中井信彦校注	日本思想史体系52　二宮尊徳・大原幽学	岩波書店	昭和四八年五月

一九三七	
一九三八	
一九三九	
一九三九	
一九四〇	
一九四一	
一九四二	
一九四三	
一九四四	
一九四七	
一九五四	
一九五五	
一九五五	
一九五六	
一九五七	
一九六二	
一九六三	
一九六六	
一九六九	
一九七〇	
一九七三	
一九七三	

No.	編著者	タイトル	発行	年号	西暦
42	安丸良夫	日本の近代化と民衆思想（文庫版）平凡社ライブラリー306　平成一一年一〇月　平凡社	青木書店	昭和四九年九月	一九七四
43	正月定夫	大原幽学の教育的思想	以文社	昭和五一年九月	一九七六
44	鈴木とき編	大原幽学　遠藤亮規と山中新田接待茶屋	鈴木とき	昭和五一年七月	一九七六
45	松澤和彦校訂	義論集	大原幽学百二十年祭奉賛会	昭和五三年一一月	一九七八
46	木村　礎編	大原幽学とその周辺	八木書店	昭和五六年一〇月	一九八一
47	普請帳研究会／株式会社真木建設編	千葉県指定有形文化財　旧林家住宅保存修理工事報告書	千潟町教育委員会	平成元年三月	一九八九
48	菱沼達也	大原幽学と百姓たち	崙書房	平成二年一月	一九九〇
49	千潟町教育委員会編	大原幽学関係歴史資料調査報告書	千潟町教育委員会	平成二年三月	一九九〇
50	松澤和彦校訂	日本農業全書63　農村振興　議定書・永代取極申引証之事・永代取極議定書・其方取直日掛縄索手段帳・報徳作大益細伝記・仕事割控・年中仕事割並日記控	農山漁村文化協会	平成七年二月	一九九五
51	木南卓一	大原幽学私新抄	宝樹社	平成八年三月	一九九六
52	大利根博物館・千潟町教育委員会編	大原幽学―幕末の農村指導者	同教育委員会	平成八年三月	一九九六
53	三島市教育委員会編	接待茶屋遺跡	三島市教育委員会	平成八年三月	一九九六
54	木村　礎	大原幽学と門人たち　木村礎著作集Ⅸ	名著出版	平成八年一一月	一九九六
55	内山朝治編	五郎兵衛日記	本郷書房	平成一一年六月	一九九九
56	内山朝治	大原幽学出自考　付／石部登日記	本郷書房（自家版）	平成一三年三月	二〇〇一

■逐次刊行物・伝記・小説・紹介記事

No.	編著者	タイトル	掲載	発行	年号	西暦
1	山路愛山	大原幽学の伝	国民雑誌2巻10号	国民雑誌社	明治四四年九月	一九一一
2	池田孝太郎	大原幽学のこと	伝記 第3巻第4号	伝記学会	昭和一一年四月	一九三六
3	那知佐典	大原幽学先生と人物教育	房総郷土研究 第3巻第2号夏季号	房総郷土研究会	昭和一一年八月	一九三六
4	鴇田恵吉	大原幽学について	千葉教育 昭和一一年八月号	千葉県教育会	昭和一一年八月	一九三六
5	高山徳治	大原幽学とその教育	教育問題研究3		昭和一一年一一月	一九三六
6	鴇田東皐	大原幽学伝雑考	伝記 第3巻12号 第4巻1号	伝記学会	昭和一一年一二月	一九三六
7	奥山市松	大原幽学先生の書簡（1）—（5）	千葉県図書館情報 第60号—64号	千葉県図書館	昭和一二年一二月	一九三七
8	三上義夫	大原幽学と信州	郷土信濃研究 第7巻第3号		昭和一三年三月	一九三八
9	高木卯之助	大原幽学事蹟雑考	房総郷土研究 第5巻第8号通巻37号 「新訂房総郷土研究」として復刻 青史社 昭和五七年一一月 以下同じ	房総郷土研究会	昭和一三年一二月	一九三八
10	那智惇齋	江戸日記に就いて大原幽学先生を憶ふ	房総郷土研究 第5巻第8号通巻37号	房総郷土研究会	昭和一三年一二月	一九三八
11	立花角五郎	性学余韻	房総郷土研究 第6巻第3号	房総郷土研究会	昭和一四年四月	一九三九
12	菅原兵治	何故に大原幽学先生を学ぶか	房総郷土研究 第6巻第3号	房総郷土研究会	昭和一四年四月	一九三九
13	鴇田恵吉	大原幽学の民育事蹟	社会事業23—2	社会事業研究所	昭和一四年五月	一九三九
14	高倉テル	大原幽学 産業組合創立百年記念のために	中央公論 昭和一四年七月号	中央公論 54—7	昭和一四年七月	一九三九
15	攷史堂	隠れたる尾張人大原幽学	無閑之32	愛知県教育会	昭和一四年九月	一九三九
16	堀田璋左右	八石教会と私	無閑之33	愛知県教育会	昭和一四年一〇月	一九三九
17	遠藤幸一郎	農聖大原幽学と其事蹟	蚕糸界報578—583	大日本蚕糸会	昭和一五年四月	一九四〇
18	菅原兵治	大原哲学の原典と中庸	房総郷土研究 第7巻第7号附録	房総郷土研究会	昭和一五年一〇月	一九四〇
19	飯田傳一	大原幽学傳資料	房総郷土研究 第7巻第8号	房総郷土研究会	昭和一五年一二月	一九四〇
20	菅原兵治	大原幽学の人物	房総郷土研究 第8巻第1号通巻55号	房総郷土研究会	昭和一六年一月	一九四一
21	服部清道	大原幽学傳の資料	房総郷土研究 第8巻第1号通巻55号	房総郷土研究会	昭和一六年一月	一九四一
22	飯田伝一	大原幽学の倫理道徳観	東洋文化205	東洋文化学会	昭和一七年四月	一九四二
23	飯田伝一	大原幽学の農村振興に就いて	東洋文化219	東洋文化学会	昭和一八年七月	一九四三
24	飯田傳一	遠藤亮規先生を語る	滋賀教育第571号	滋賀県教育会	昭和一八年九月	一九四三
25	竹内幾太郎	幽学先生逸話（1）—（2）	房総展望 第3巻第11—12号	房総展望社	昭和二四年一一月	一九四九

No.	編著者	タイトル	掲載	発行	年号	西暦
26	柴田武雄	大原幽学ノート	房総展望　第4巻第9号	房総展望社	昭和二五年九月	一九五〇
27	遠藤幸一郎	土の聖者	自治公論18巻5―6号	全国自治協会	昭和二六年五月	一九五一
28	畑中　治	大原幽学の教育	師友48	全国師友会	昭和二八年	一九五三
29	小林英一	大原幽学論	思想407	岩波書店	昭和三三年五月	一九五八
30	小林英一	下総国香取郡における平田篤胤と大原幽学	地方史研究38　第9巻2号	地方史研究協議会	昭和三四年四月	一九五九
31	中井信彦	大原幽学	地方史研究38　第9巻2号	地方史研究協議会	昭和三四年四月	一九五九
32	中泉哲俊	大原幽学の思想	弘前大学教育学部紀要7	弘前大学教育学部	昭和三六年二月	一九六一
33	小笠原長也 堀江俊次 池田宏樹 川名　登	東総農村と大原幽学―千葉県香取郡干潟町近世史料調査報告書―	千葉大学文理学部文化科学紀要5輯	千葉大学文理学部	昭和三八年	一九六三
34	大槻宏樹	19世紀前半社会教育運動の性格とその機能	日本の教育史学　第6集	教育史学会	昭和三八年・復刻 昭和五二年一〇月	一九六三
35	久木幸男	社会教育家としての大原幽学	仏教大学研究紀要48号	仏教大学	昭和四〇年九月	一九六五
36	相原寅松	大原幽学について	神戸女子短期大学論攷文科編19	神戸女子短期大学	昭和四九年二月	一九七四
37	土屋重隆	二宮尊徳と大原幽学	経済集志44―3・4・別		昭和四九年	一九七四
38	大槻宏樹	大原幽学の換子教育と村改革	学術研究24号	早稲田大学教育学部	昭和五〇年	一九七五
39	水谷盛光	大原幽学出自考説（抄）―新史料の発掘について	郷土文化　第29巻第3号通巻112号	名古屋郷土文化会発行	昭和五〇年三月	一九七五
40	川名登／旭市史編纂委員会	大原幽学関係史料	旭市史　第3巻	旭市役所	昭和五〇年三月	一九七五
41	水谷盛光	大原幽学出自考	日本歴史　第322号	吉川弘文館	昭和五〇年三月	一九七五
42	宮崎　蔚	教育者としての大原幽学―性理学の形成過程と教科活動の展開―	東京成徳短期大学紀要　第8号	東京成徳短期大学	昭和五〇年四月	一九七五
43	水谷盛光	大原幽学出自考説（補遺）―幕府容認「幽学は、高松彦七郎弟」説について―	郷土文化　第30巻2号通巻114号	名古屋郷土文化会発行	昭和五〇年一二月	一九七五
44	水谷盛光	大原幽学出自考説（補遺Ⅱ）―新史料の発掘について―	郷土文化　通巻116号	名古屋郷土文化会発行	昭和五一年	一九七六
45	川名　登	大原幽学門人の社会的性格	日本歴史　第335号	吉川弘文館	昭和五一年	一九七六
46	土屋正次郎	近世末期の農村計画―大原幽学の村造りから―	信州自治四月号	長野県地方課発行	昭和五一年	一九七六
47	土屋正次郎	大原幽学―農村指導者の原像を求めて―	技術と普及9―12月号	全国農業改良協会発行	昭和五一年	一九七六
48	石川　謙	大原幽学の児童観	「わが国における児童観の発達」	青史社	昭和五一年一二月	一九七六
49	水谷盛光	大原幽学出自考説（補遺Ⅲ）―『大原幽学の教育思想研究』を駁す―	郷土文化　第31巻2号通巻117号	名古屋郷土文化会発行	昭和五二年一月	一九七七

50	戸沢行夫	大原幽学の教導仕法について―その婦女子教育を中心に―	史学　第48巻第2号	慶應義塾大学文学部内　三田史学会	昭和五二年六月	一九七七
51	藤田昭造	明治初期村落と性学門人層	駿台史学　第41号　特集・大原幽学とその周辺	駿台史学会	昭和五二年一一月	一九七七
52	正月定夫	『大原幽学の教育思想を駁す』に答う	郷土文化　第32巻1号通巻119号	名古屋郷土文化会発行	昭和五二年一〇月	一九七七
53	松澤和彦	大原幽学日記（全集本）の検討	駿台史学　第41号　特集・大原幽学とその周辺	駿台史学会	昭和五二年一一月	一九七七
54	木村　礎	性学仕法の基礎的考察	駿台史学　第41号　特集・大原幽学とその周辺	駿台史学会	昭和五二年一一月	一九七七
55	木村　礎	大原幽学の受容と変質	明治大学人文科学研究紀要17	明治大学	昭和五三年	一九七八
56	木村　礎	大原幽学と農民	江戸と地方文化2　木村礎編	文一総合出版	昭和五三年	一九七八
57	穴見　博	下総長部村先祖株組合の性格に関する考察（1）（2）	農業総合研究32巻3・4号　通巻131号	農業総合研究所	昭和五三年七月	一九七八
58	原　博	大原幽学の思想	青稲　第20号	青稲同人	昭和五三年一〇月	一九七八
59	福山裕貴子	大原幽学研究の課題	海上町史研究11	海上町史編纂委員会	昭和五四年七月	一九七九
60	三矢伸子	下総における幽学門人とその動向―先祖株組合をめぐって―	海上町史研究14	海上町史編纂委員会	昭和五五年	一九八〇
61	木村　礎	大原幽学の思想―体系と核心―	芳賀幸四郎先生古希記念「日本文化史研究」所収	笠間書院	昭和五五年五月	一九八〇
62	木村　礎	大原幽学の思想	津田秀夫編「近世国家の展開」所収	塙書房	昭和五五年一〇月	一九八〇
63	遠藤良太郎	幽学叢話　1―12	広報ひかた　第119―130号	干潟町	昭和五七年一月	一九八二
64	川俣英一	大原幽学の農村計画	農村計画資料　第5集	茨城県田園都市協会	昭和五七年三月	一九八二
65	五木田治己	大原幽学没後の性学とわが曾祖父	芝山町史研究2		昭和五八年	一九八三
66	福山裕貴子	東総農村における性学運動の展開―先祖株組合を中心に―	お茶の水史学28		昭和六〇年	一九八五
67	木村　礎	大原幽学門人椎名琁蔵と性学飯倉組	史潮　新20号		昭和六一年	一九八六
68	松澤和彦	高松家と大原幽学	歴史論8号	明治大学近世史研究会	昭和六二年九月	一九八七
69	藤田昭造	性学運動の展開と前夜組織	歴史論8号	明治大学近世史研究会	昭和六二年九月	一九八七
70	門前博之	長部村についての一考察	歴史論8号	明治大学近世史研究会	昭和六二年九月	一九八七
71	木村　礎	文書紹介「出先・手先等悪事風聞書」	歴史論8号	明治大学近世史研究会	昭和六二年九月	一九八七
72	大原康男	大原幽学の出自	「続尾張大原氏の一系譜」所収	大原康男	昭和六二年一一月	一九八七
73	横山十四男	大原幽学の教育実践	津田秀夫編「近世国家と明治維新」所収	三省堂	平成元年八月	一九八九
74	山口惣司	幽学雑感　幽学式コンミューンの創設と崩壊・その他	会報　第5号	東庄郷土史研究会	平成元年九月	一九八九

No.	編著者	タイトル	掲載	発行	年号	西暦
75	松丸明宏	大原幽学の教育実践―日記の分析を中心として―	千葉史学　第14号	千葉歴史学会	平成元年五月	一九八九
76	菅野則子	大原幽学に見る「家」と女性・子供	近世女性史研究会編「江戸時代の女性たち」所収	吉川弘文館	平成二年	一九九〇
77	平澤幸彦	微味幽玄考　その1―その10	広報ひかた　第232―241号	干潟町	平成三年六月	一九九一
78	高部淑子	近世後期～明治初年の小見川周辺と性学―高木平兵衛日記を中心として―	千葉県史研究　第2号	千葉県	平成六年三月	一九九四
79	藤田昭造	大原幽学の教化活動と性学組織	駿台史学　第90号	駿台史学会	平成六年	一九九四
80	増田家淳	幕末・明治の庶民の生活の記録―小見川町の一農家に伝えられた三代六十余年間の日記から	香取民衆史　7	香取歴史教育者協議会	平成六年八月	一九九四
81	和泉清司	大原幽学における経済思想と近世社会	千葉歴史学会編「近世房総の社会と文化」所収	高化書店	平成六年七月	一九九四
82	斎藤洋一	大原幽学幽学と上田町・小諸町との関わりを示す史料	学習院大学史料館紀要　第8号	学習院大学史料館	平成七年三月	一九九五
83	小倉　章	大原幽学に関する覚書	房総春秋　No.20記念号	房総地域文化経済調査会	平成八年三月	一九九六
84	宮本惇夫	大原幽学の性学	月刊　黙　二月号	株式会社エモーチオ21	平成九年二月	一九九七
85	市岡義章	大原幽学の共同体思想―「先祖株組合」の論理的基礎―	「過渡期の世界　近代社会成立の諸相」	日本経済評論社	平成九年一月	一九九七
86	米谷　博	性学墓について　千葉県香取郡山田町の事例から	民具マンスリー30巻11・12号	神奈川大学日本常民文化研究所	平成一〇年二月	一九九八
87	米谷　博	明治期千葉県における墓地の開設―香取郡の性学墓をめぐって―	町と村調査研究　創刊号	千葉県立房総のむら	平成一〇年三月	一九九八
88	長尾　剛	いま甦る幕末の教育者「大原幽学」	新潮45　第17巻第4号通巻192号	新潮社	平成一〇年四月	一九九八
89	高橋　敏	大原幽学と江戸訴訟	歴史学研究　No.717	青木書店	平成一〇年一一月	一九九八
90	見城悌治	近代日本社会における大原幽学の「発見」	歴史科学と教育　第18号	「歴史科学と教育」研究会	平成一一年一〇月	一九九九
91	高橋　敏	大原幽学と改心楼乱入事件	「幕末維新の社会と思想」田中彰編	吉川弘文館	平成一一年一一月	一九九九
92	宇井　弘	大原幽学危難の発端牛渡村一件（幽学自殺へと帰結した改心楼乱入事件発生の誤認について）	山田の郷土史　第6号	山田町郷土史研究会	平成一一年一二月	一九九九
93	見城悌治	歴史随想　近代における「偉人」の発見―大原幽学の場合	千葉史学　第34号	千葉歴史学会	平成一二年五月	二〇〇〇
94	内山朝治	幽学出自考抄	東庄の郷土史　第16号	東庄郷土史研究会	平成一二年六月	二〇〇〇
95	菅谷栄夫	教師憲章を読む―大原幽学の師徳	弘道　第一〇〇八号	日本弘道会	平成一二年一〇月	二〇〇〇
96	見城悌治	創られる歴史意識―「偉人」という陥穽	アエラムック　日本史がわかる	朝日新聞社	平成一二年一二月	二〇〇〇
97	内山朝治	万松寺の幽学墓碑について	山田の郷土史　第8号	山田町郷土史研究会	平成一三年一二月	二〇〇一

98	菅谷栄夫	郷土の先覚者—大原幽学	郷学　第35号	財団法人郷学研修所・安岡正篤記念館	平成一三年四月	二〇〇一
99	高橋　敏	近世後期村落社会組織と家族・子供・若者—大原幽学の改革と生活習俗	「岩波講座近代日本の文化史2　コスモロジーの「近世」」所収	岩波書店	平成一三年一二月	二〇〇一
100	高橋　敏	大原幽学先生の江戸	歴博　第110号	国立歴史民俗博物館	平成一四年一月	二〇〇二
101	木村　礎	いわゆる「改心楼事件」の勃発年について	ひかたの歴史と民俗4号	大原幽学記念館・干潟町歴史民俗研究会	平成一四年三月	二〇〇二
102	木村　礎	松澤和彦「高松家と大原幽学」および同「補正」について	ひかたの歴史と民俗4号	大原幽学記念館・干潟町歴史民俗研究会	平成一四年三月	二〇〇二
103	童門冬二	諸国賢人列伝　大原幽学	ガバナンス4月号	ぎょうせい	平成一四年四月	二〇〇二
104	長尾　剛	近代学校教育を越えた江戸の教育者	「知のサムライたち　いまこそ日本をささえる10人の思想」	光文社	平成一四年五月	二〇〇二
105	鈴木映里子	大原幽学遺跡の保存と活用	千葉史学　第41号	千葉歴史学会	平成一四年	二〇〇二
106	見城悌治	一九三〇年代における「模範的人物像」表象—大原幽学と二宮尊徳を事例として—	人民の歴史学第153号	東京歴史科学研究会	平成一四年九月	二〇〇二
107	川崎史彦	地曳網主による水主の飲酒規制	日本歴史一〇月号　吉川弘文館	日本歴史学会・吉川弘文館	平成一四年一〇月	二〇〇二

Bulletin of the National Museum of Japanese History
vol. 115 February 2004

Research on OHARA Yugaku Viewed from the *"Bugyosho-hon"*: a Historical Study Based on *"Yugaku Zensho"* and *"Yugaku Zenshu"*

SUZUKI Eriko

This paper is an examination of historical documents based predominantly on primary sources. Most research on the subject of OHARA Yugaku, an agrarian leader who was active in the Toso region of Chiba Prefecture, has been based on *"Yugaku Zensho"* and *"Yugaku Zenshu,"* collections of his works. However, as has been pointed out, this has been a factor in misconceptions and misinterpretations concerning the true facts surrounding the time of Yugaku's capture by Edo authorities.

The purpose of this paper is to shed even a little light on the problems faced since the publication of Yugaku's *"Zensho"* and *"Zenshu"* as source books by checking the works recorded in these"sacred books" that today, some 50 years after their publication, have a huge effect on research on Yugaku.

The manuscripts referred to as the *"Bugyosho-hon,"* that have over the years been taken up for discussion only rarely, have been rediscovered. The Ushiwata Village Incident, when agents of the Kanto authorities forced their way into Kaishinro, Yugaku's education center, occurred in April 1852, and after undergoing investigations by the Kanto authorities in Choshi Honjo village Yugaku and his disciples were sent to the magistrate's office, a higher authority. Then in October that same year Yugaku was summoned to the Edo capital. Evidential documents were submitted at the time of this summons. It is believed that Yugaku took these documents with him back to the village he returned to when the magistrate's decision was handed down in 1857. And it is a number of these documents that have been specially put together and handed down to the present day. The personal writings of Yugaku, which would have been recognized by Yugaku's disciples as most important documents, are collected in what is known as the Bugyosho-hon. In other words, they are fundamental materials that form the core of Yugaku's beliefs.

Thus, the objective of this paper is to form a new understanding of the course of events surrounding Yugaku's capture by authorities from a present-day perspective through a re-examination of the nine volumes of the Bugyosho-hon, which are also recorded in Yugaku Zensho and Yugaku Zenshu, and extant papers and documents.